

## 第三章 揚州

**己**を変えろとは容易ならざるわざである。

確信を得るよりも前に、すでに新たな己を人の前に示した。依怙地な薛未亡人によって母親を追い出された幸薄い従弟を杖で撃ち据えたことで、貢拳に落ちて失意に沈んだ己は過去のものになった。

貢拳と一族。生まれてから二十七年の間、この二つに縛られてきた。貢拳に受かれば一つからは解放されただろうが、失敗したからには、再び縛りの中に戻るか、どこかに逃げるかしかなかった。逃げるのではなく、新たな己を見つげるためだとして旅に出た。

貢拳を目指していたころの己は、無理に作らされた己だ。先祖のために、一族のために、己のためにだ。貢拳をやめて、この先をいかに生きようとも、

己はあるし、一族は居るし、先祖は前から居る。これらは変わりようがない。一族は煩わしい存在であつても、それが居るから莊園があり、気ままな旅も可能となる。莊園がなければ、徐州から逃げてきた劉赤虎のように盜賊か兵士になるしかない。

章華台での韋蘭の予言が当たれば、世は乱世に向かう。劉晔が罵倒したように貢拳に落ちた青虫は役に立たず、貢拳に合格して官人となつた連中も唐とともに滅びよう。乱世に生まれ合わせたのを幸いとし、劍を手に大地を縦横に駆け巡る類の人間では己は決してない。とすれば、乱世における生き方の理想は、敢えて高く掲げて田疇しかない。田疇のような強い意志はなく、人に慕われる徳義もない。ただし、何も無い山奥に入って村を築いた田疇と比べれば、すでに田も畑も池も林も揃つた立派な莊園がある。これをもとに、乱世になろうとも、自在に生き抜く手段が見出せるかも知れない。己一人では無理でも、韋蘭がいてくれればどうにかなろう。己のため、一族のため、先祖のために貢拳を目指してきたのをやめ、これからは、己のために生き

る。

莊園の経営は苦しい。韋応物以後の四代で先祖の遺産を大方食い潰した。このままでは遠からず消滅だ。田疇は無から村を築いたのに、堂々の莊園がなぜ滅びるのか。さしあたり原因は二つだ。人が多すぎる。居て食うだけならまだしも、富を蝕み盗み出す連中がいる。そして役人どもだ。田疇は山中で得た全てを一族のために使った。莊園の收穫物は何だかんだと役人どもに持っていかれる。先祖の遺徳による特権があつてもだ。それを食い止めねばならない。

これからの莊園のあり方について、旅の終わりに、蘭と繰り返し相談し、莊園の中を主に韋莊が、外を主に蘭が受け持つとした。まずは惰性で暮らす人々に活を入れなければならぬ。そのための第一が杖撃ちだった。

叔父の韋韜、弟の莠と藹、それに楊爺が、新しい己をどのよう受け止めるのか、それが心配だった。この四人はこれまで己を最も良く理解してくれていた。四人の誰か一人でも失望させるようになっては悲しい。それを察し

て、「兄貴は人の目を気にしすぎますな」と蘭は笑った。

もともと韋荘は人の顔色を見る性質である。貢奉合格後の実技試験に自信を持ち、官界に出ればうまく渡っていけるだろうと思っていたのは、機を見るに敏であると自認し、他人の思惑をすばやく探り取るのは不得手でないと思っていたからだ。それでも、何かの加減で相手に合わせられなくなると、急に人を怯える弱さがある。貢奉に落ちた後には一族の誰とも会えない状態に陥った。そのときに支えとなってくれたのが、蘭とこの四人だ。この四人だけにはこれまで通りの己として見てほしいのだが、一人の己を使い分けるのは難しい。

旅から帰ったその日に、「明日よりこの荘園を私にお任せいただきたい」と、叔父に申し出た。「それが旅で得たことなのか」と叔父は尋ねた。韋荘が肯定すると、「それならよかろう」と言い、続いて韋荘が荘園経営についての考えを説明しようとする、「そなたとは別の話をしよう」と遮った。

弟の莠は、旅の前に言い置いた通りに、妻を娶っていた。「莠ちゃんにびっ

たり」と薛未亡人が太鼓判を押した娘を、近くの町の柳(りゅう)氏から迎えた。韋荘の妻は「能なし」の韋韜が勝手に決め、とんでもない女だと怒っている薛未亡人であるから、莠には絶対に間違いない娘をとよくよく吟味した。韋荘が帰ったのは結婚から二ヶ月が経っていて、夫婦仲はすこぶる良好と見えた。相も変わらず一人で碁石を並べて過ごすことが多い夫を、妻はその脇で見守り、教わりもしないのに、石の並べ方を会得した。柳氏は無口にして聡明である。

一風変わった性癖の二人の弟が、好みすることに没入しているのを見るのは韋荘にとって喜びである。弟も兄がいると安心するようだ。兄弟のこのような間柄が、己が変貌したことで崩れてしまうのを恐れた。考えをあれこれ説明しても、うまく理解してもらえないだろうと、思い切って、杖で撃つ姿をいきなり見せた。弟に格別驚く様子はなかった。自分の好みのことにはか関心がないのか。兄はもとより兄であつて、何をしようとするは変化しないと思っただけなのかも知れない。

楊爺は生まれたときからそばにいて、何でも助けてくれた。楊爺がどう思うかなどと気をまわしたことはなく、楊爺はいつでも己のことを真先に考えていてくれると思っていればよかった。旅の間に楊爺から離れ、これまでとは少しばかり違う目で楊爺を見るようになった。楊爺がどうしてこれほどまで尽くしてくれるのか。当たり前だったことがますますわからなくなつた。楊爺はなかなかの知恵者で、主人しか目に入らないほど単純ではない。旅から帰つて、己の考えを楊爺に注意深く話し始めると、くどくど言うのは無用とばかりに手で遮り、即座に万事先回りして進めてくれた。杖で撃つと決めた三人の罪状を詳細に調べ上げ、刑罰のための杖も法の定め通りに作つてくれた。

楊爺は長安に生まれ、二十歳を過ぎたころに韋荘の父に雇われ、韋家にきて二十数年になる。それくらいでは、歴史の長い家では新参者だ。韋家には伍家や范家など、何代にもわたつてそれぞれの仕事を受け持ってきた家がある。楊爺は韋荘や弟たちの身の回りの世話をするのが割り当てられた仕事で

あるのだが、韋莊の妻がきてからそれを取り上げられた。莊園における居場所を失い、お払い箱になっても仕方のないところを、韋韜のはからいで、狐潭の管理人として池の畔の小屋に一人で住むようになった。韋莊が莊園の主となったからには、これからは池以外のこともしてもらわないとならない。莊園の古株連中と難しいことが生じそうだ。

莠が結婚したために弟の家はかなり手狭となった。韋莊は叔父と代替わりしたのだから、立派な門のある屋敷の方に移るべきではあるのだが、そこにはいままで通り、韋韜、蘭の父子と、薛未亡人一家にいてもらうことにする。叔父にはいずれ南山のあたりに隠居所を建て、念願の悠々自適の生活を入ってもらおうつもりでも、薛未亡人一家はたぶんそのまま屋敷にいることになるだろう。薛未亡人には、杖で叩かれた妾の子の愠も含めて三人の息子がいる。愠の二人の兄は韋莊よりも齢が上で妻も子もある。嫁に行く前の二人の妹もいるし、さらに親戚筋の何人かが同居している。それだけの大人数を他所に移すのは大ごとで、薛未亡人が承諾するはずがない。薛未亡人を怒らせると

面倒である。

薛未亡人には当たらず触らずでいよとの考えだったが、旅から帰って以降、薛未亡人はなぜかすこぶる上機嫌である。叔父との代替わりも、三人を杖で撃つたのも、薛未亡人は、「さすが荘ちゃんは違う」と感嘆することしきりなのである。薛未亡人が本当に喜んでいいるのなら、それを利用するがよい。

韋荘が莊園の主になったのだから、一族の女の頂点に立つのは普通なら韋荘の妻だ。そうはしたくない。妻と顔を合わせるのは御免だ。旅から帰った後も、妻や子とは絶縁状態のままだ。それがまた薛未亡人の気をよくさせている。

それで、莊園の女たちの総元締めを薛未亡人に頼んでみると、大喜びで引き受けてくれた。薛未亡人は莊園の隅々にまで目を光らせる。薛未亡人の声を聞くだけで女たちは震え上がる。弛緩していた莊園の空気がそれだけで一変する。薛未亡人はいたく御満悦である。しばらくすると、薛未亡人がいちいち怒鳴らなくてもきちんとするようになり、以前のように口うるさくなく



なる。

男たちにもこれまでの慣習を捨てさせ、新たなに仕事を割り振る。その準備として、韋荘は莊園の実態を調査する。楊爺は誰が何をしていたのかを調べ、莠は莊園が所有する財産と土地の使い方を調べる。莠は嬉々としてもものを数え長さを測り記録する。人と土地をどう効率的に使うのか、韋荘、蘭、楊爺の三人で計画を練る。藹は書庫にあった各種の家訓や法令を調べ上げ、それに基づいて、韋荘と蘭が、一族の誰もが守るべき簡単な規則を作成する。藹がきれいに清書し、各戸を回って口ずから教える。藹が美しい声で朗誦すると、厳格な規則も何やら楽しいもののように感じられる。子どもたちが真っ先に覚える。韋荘、蘭、莠、藹、楊爺の五人は、毎朝、屋敷の中堂に集まり、その日に為すべき大小様々なことを決め、韋荘が厳しい顔で莊園を見て回り、人々の動きを監視する。こうして、新しい莊園経営が日々の積み重ねとして動いていく。

韋荘が杖で撃った三人は莊園に残った。酔っ払いの伍武の爺さんは、子や

孫が揃って許しを請いに来た。伍武自身が、主家のために身を捧げると、地に伏して泣いて誓った。「伍家の模範となるようしつかりするんだぞ」と言い渡して終わりにした。

范執事は騙し取ったと指摘された金額を弁済した。それで全てではないようだったが、それ以上の追及はとどめた。執事の仕事をやめさせ、息子の范実（ほんじつ）を執事見習いとして屋敷に入れた。范執事はもともと凡帳面な小心者で、范実はそれ以上に生真面目な性格である。范の家は代々莊園経営の事務を務め、種々様々な帳簿類を作成してきた。叔父の韋韜は帳簿などにはほとんど目を通さなかったが、韋莠はそこに羅列される数字に興味を持ち、次第に帳簿付けを面白がるようになる。

妾の子の愠が杖で撃たれたことには同情的な女が多かった。韋莊の心にもしこりが残った。愠を撃つのは旅の間に決めたことだったが、もしもあのと妻が叫び声を上げていなければ、あそこまでひどくは撃たずに終わったはずだ。妻の叫びを無視し、振り降ろす杖の先で愠の白い肌が破れ、赤い血が

ほとばしると、ぞくつとするような快感を覚えた。後からその感触を思い起こすと、気が塞ぐ。人の痛みを喜ぶほど愚劣な男ではないとの自負が、その後の慍の扱いを温情的なものにさせる。弟の藹を見舞いにいかせ、「これから勉強に励むように」と言い聞かせる。慍はその通りに誓い、韋荘は勉強部屋と書物などの一切を慍に譲る。慍は薛未亡人のいる屋敷から離れ、ほとんどの時間を勉強部屋で過ごすようになる。

薛未亡人が女たちに君臨するようになってから、韋荘の妻は一族の中でこれまで以上に孤立し、二人の子どもと老女と乳母、それに慍を相手に息を潜めて暮らすしかなくなる。

娘や息子との接触を絶ったままでも寂しいと感じることはない。離れたところからたまに子どもの姿を見かけても、他所の子を見るのと何ら変わらない。むしろ娘の目が己に向けられているとわかると少々不愉快に感じさえする。蘭は、娘や息子と時には話をしていくようだ。以前は二人とも蘭と仲が良かった。母親が蘭も毛嫌いするので、自ずと距離ができた。

莠が調べた結果、莊園でほったらかしになっている土地の正確な面積がわかる。人間がたくさんいるのに、これではいかにももったいない。それぞれの用途を決め、順次振り向けていくようにする。

これまでの沈滞していた雰囲気が改まり、莊園の人々が己の指図に従って動き回るのを見るのは、ある種の快感を与えてくれる。前の年には見るのも、見られるのも嫌だった人々である。それが意図したように、己の目を恐れて働くようになる。韋莊としては、いままでになく己を保ちやすいと感じる。これが本来の己であったのかと思えもする。薛未亡人が嬉しげであるのが理解できる。叔父の韋韜はともかくとして、莠と藹の弟と、楊爺の三人は、変貌した韋莊をすんなり受け入れてくれているようである。

**秋**の半ば、韋蘭は雀蛤の札を雀の側にして、長安に上る。

莊園を支えるもう一つの仕事のためだ。役人を丸め込むには資金が要る。

韋家には先祖から伝わる書画装飾品類が多々あり、うまく売れば良い金になるのは旅に出る前に蘭が実証した通りだ。売って得た金をそのまま役人に貢いだのでは、元手の売り食いで面白くない。金は膨らませるべきだ。あわよくば、莊園が抱えている負債を返す分くらいを稼ぎ出してやろうと言うのが韋蘭の目論見だ。

楊爺の弟の楊銀（ようぎん）が長安で商売をしている。長安には、東市と西市の二つの官製市場がある。西市には西方からの胡人が多く住み、東西の産物が集まって活気があり、成功すれば巨利がころがり込む。東市は周辺に高位高官や豪族の屋敷が多く、お上相手の商売が主で、見た目は地味だが安定している。市で商売をする者は同業者ごとに行（こう）を作り、行は市の中央に置かれた役所の監視を受ける。この東市と西市の二箇所以外での商取引は原則禁止であるが、法の網をくぐって、実際には、市以外の場所にもたくさんのお店がある。

楊銀は東市に小さな店を持っている。東市の西隣の平康坊（へいこうぼう）に

名高い遊里がある。楊銀は妓楼相手の八百屋で、あちこちの店に出入りして遊里の事情に通じ、韋荘の色里遊びの手助けをした。楊銀の親類筋に、東市で絹ものを扱う絹行の元締めの大武人（ふたいじん）がいる。大武人の家は代々東市の顔役で、羽振りが良かったころの韋家とも旧縁があり、韋荘の父が楊爺を雇ったのは、大武人が「この男は苦勞人で間違いない」と保証したからだ。

蘭は楊銀の案内で大武人を訪ね、長安で商売を始める相談をする。「あなたさまのような大家の御曹司が、生き馬の目を抜く都でとんでもない」と、大武人は止める。それで気後れする蘭ではない。楊銀の店に居候し、そのこねを使って、やはり妓楼相手の商売を始める。八百屋ではどううまくやってもたかが知れている。蘭は書画骨董に目がきき、弁が立つ。それで妓楼に値の張る調度品を売り込む。色里にはうまい汁を吸おうとする小悪党や小役人がはびこっている。蘭はそれらをうまく丸め込み、妓女やその養母に愛想を振りまき、一軒また一軒と自由に出入りできる店を増やしていく。その様子を

見守っていた武大人は蘭に商才があると認め、援助してくれるようになる。二年も経たないうちに、楊銀の居候の身を脱し、東市の南の安邑坊（あんゆうぼ）に自身の店を構えるまでになる。

並行して莊園の改革も順調に進む。楊爺は長安の生まれだから農耕の経験がない。莊園の古株たちは、楊爺のことを何も知らない新参者と見下していた。人々は怠惰に流れ、長く受け継がれてきた技能を真面目に引継つぎごうとする若者はいなくなっていた。古株たちも「いまの若い者はどうしようもない」とぼやくだけですませていた。楊爺は敢えて腰を低くして古株たちに教えを請うて歩き、やる気のありそうな若者を選び、古株に習った知恵を新しい開墾地で活かす試みを始める。

初めは見よう見真似であった楊爺であるが、仕事に徹するとなると人の比ではなく、二年目、三年目と、開墾地は豊かに稔り、作付けの面積も作物の種類も増えていく。それを見て、その仲間に加わろうとする者が出てくる。

しかし、殊勝な人間は当然、少数である。何かと窮屈で多忙になった人々

の間に不平不満がくすぶり、時間とともに鬱積していく。韋韜の時代は何がよいと言つてとにかく気楽だった。韋莊と薛未亡人の二人から、やいのやいのと追いまくられてばかりでは面白くない。表面上は従うしかなくても、鬱憤は溜まる。韋莊もそれは感じ取る。どうしたらよいのかわからない。ようやく実効が上がってきた改革を後退させる訳にはいかない。厳しく抑えつけると不平は聞こえなくなる。しかし、消えるものではない。

やっかいなのは、鬱屈は莊園の人々だけにあるのではなく、己自身にもありそうなことだ。三年目に入って、気分がすぐれない日が多い。変貌した己を保ち続けるのに疲れが出てきたのかも知れない。そう自覚したところで、対処のしようがない。莊園の主として気を緩める訳にいかない。

春の終わりに、楊翁が愉快なことをする。

お狐さまが夢に現れ、「狐潭の総浚いをせよ」と告げたと、楊翁が言い出す。

莊園の古株たちは、これまで一度だつてそんなことはしていないし、水を抜いた後でもしも雨が降らなかつたら莊園は乾上つてしまつと、お告げを信じ



ようとしなない。韋莊は、狐潭のことはこれまで通り楊爺に任せると、総浚いを許す。しかし、楊爺をもとから快く思っていない連中がここぞとばかりに反発し、なかなかの騒ぎになる。薛未亡人が乗り出す。薛未亡人は仏教だろ、うが道教だろ、うが、有難そうなものは何でも信じ、占いや御祓いを好み、大勢の道士、術士、方士を知っている。一人を招いて総浚いについて占わせる。大々吉と出て、総浚いが実行される。

莊園の男たち総動員の大仕事である。堤を切って水を放つ。水が抜かれた池の底を掘り下げ、泥を掬って田畑へと運び入れる。何日もかかる重労働だ。総浚いの最終日に、小さな水たまりとなった狐潭で、男たち全員の魚の掴み取りが行われる。狐潭での釣りは限られた人だけと厳重に定められている。この日は誰もが獲りたい放題だ。裸の男たちが歓声とともに泥を跳ね上げて水溜に突進する。両手を差し伸ばして四周から迫りくる男たちに、魚が宙へと跳ねる。南山の肩に建てられた隠居所に引つ込み、人前にあまり姿を見せなくなっていた叔父の韋韜も、男たちの中に裸で混じる。人々ともつれあっ

て泥にころび、顔まで真黒にする叔父の楽しい姿を見て、韋莊は切ない思いに沈む。

叔父は口に出しはしないが、韋莊のやり方に思うところがあるはずだ。新しい莊園経営は成功してきている。それは間違いない。しかし、人々を駆り立ててきたのが良かったのか、己が旅の前と後とで違う人間になったのが良かったのか、確かとは言えないところもある。

以前の叔父のやり方と韋莊のやり方は正反対なくらいに違う。叔父は、怠惰な者、あるいは不正を為す者がいても、見ぬ振りをし、その者もいずれば自身で己を正すと考え、自ずからなる人々の働きによって莊園がいつか自然と良くなっていくと期待していた。現実には、身を正す者はおらず、むしろ自然の勢いとして怠惰に流れる者が増え、莊園は悪くなってきた。叔父の理想は高いところにあり、叔父自身がいくら高潔であっても、何もせずして人々がそれに感化されたりはしなかった。薛未亡人はそのような叔父を能なしと罵倒し、その薛未亡人を依怙地な女と敬遠していた韋莊であるのに、薛未亡

人と手を取り合つて、人々を上から手厳しく取り締まり、駆り立ててきた。莊園の雰囲気は張り詰めたものに一変し、経営状態は改善された。それがこのまま続くのか、叔父は危惧の念を抱いていそうだ。池の総浚いを楊爺が叔父に相談したのかどうかはわからないが、二人は通じ合う思いを持っているようだ。

己自身も危ういようだ。旅から帰つて今日まで、無理やり動かされてきたことでは、莊園の人々と実のところ大差がないのではなからうか。変貌した己こそが本来の己であると、思えてきつつあると感じていた時期もあった。人々を意のままに操っている己を、心の底から良しと納得するものならば、確信に至つただろう。気が塞ぐことが増えてきたのは、己をこのようにしていることに無理があるからではないのか。叔父のためにだけでも合格したかつたとかつて思ったのは、取りも直さず、叔父と共通するものが己にあるからだろう。

叔父の時代には戻れない。莊園はまだまだ前進させねばならない。己にも

人々にももつと厳しくすべきだ。だが、張り詰めているばかりでは長続きしない。叔父も楊爺もそれがわかつているから、この総浚いに興じる姿をここで見せているのだろうか。杖で撃って人々を追い立てる、何という未熟なやり方だ。いまの己にはそれしかできない。

山のように魚が獲れる。煮たり焼いたり、女も子どもも集まっただけの食べ放題だ。酒も振る舞われる。皆が大いに楽しみ、総浚いの労苦が吹き飛ぶ。

時を合わせたように、次の日から雨が降り、ほどなく池に再び満々と水が湛えられる。お狐さまの夢は本当だったに違いないとなり、お狐さまの祠に願い事をする者が急に増える。

来年か再来年の秋に、楊爺のかねての念願であるお狐さまの祭を盛大に行おうと、韋荘は考える。楊爺を喜ばせ、人々に楽しみを与える。それがこれからの目標だ。問題は金がかかることだが、楽しみのためなら人々もついてきてくれるだろう。

**韋莠**に子が生まれる。娘だ。弟の子を可愛いと素直に感じる。

家はいよいよ手狭になり、屋敷の隣に韋莊三兄弟の住む家を建てることになる。お狐さまのお祭と合わせるとかなりの物入りだ。莊園の生産は期待通りに伸びてきている。それでも、かつて叔父が借りた金の返済はほとんど手がついていない。まとまった金の算段となると、莊園で地道に稼ぐのでは間に合わない。

咸通六（八六五）年の夏の終わり、蘭からの要請を受けて、韋莊も長安に上る。都の名士との交友関係を開拓し、商売に活かすためだ。

韋莊は名族の子孫、風采は優美、詩は得意、万事如才ない。この前の旅の間に蘭に詩を批判されてから、どうあっても杜甫に適うものではないと、詩作への情熱を失っていた。しかし、社交用の詩ならお手のものだ。韋莊の名はすぐに人の知るところとなり、蘭の商売の手蔓が次々に生まれ、妓楼から、高位高官、富豪へと広がる。「こんな珍しいものがありました」と、何気なく

韋莊が話をし、相手が興味を持てば、蘭が実物を見せにいく。人の心を掴むことにかけては蘭の才は恐るべきものがある。それに本当に良い品物しか扱わない。すぐに信頼を得て、高価なものも売りさばけるようになる。

長安には、貢奉に合格したり中央に栄転したり一攫千金の商売を当てたりと、俄に勃興する家もあれば、一夜にして破滅する家もある。命運尽きた家から四散していく品を、蘭は買い集め、その中から間違いないものを選んで商う。出入り先が増えると、良い話がますます増える。蘭の成功を見て、冬に韋莊は莊園に帰る。

蘭はこれで満足せず、かねてから土地勘のある洛陽にも商売の手を広げる。長安は西の都、洛陽は東の都と呼ばれ、両方に皇帝の住まいがあり、同じように百官が揃っている。洛陽は功成り名遂げた人々が余生を送る場所としての性格を帯び、典雅で気品のある品物が好まれる。洛陽で売れそうなものを長安から運び、長安で生まれそうなものを洛陽から運び、多くの利を得る。

早くも咸通八（八六七）年春までに、莊園が抱えていた負債はあらかた返済

し終わり、小金を撒いての號州周辺の役人の懐柔工作も効果を上げ始める。役人たちは韋莊や蘭の姿を見れば、ほくほく顔で手揉みして寄ってくる。

莊園で増産に特に力を入れてきたのは蚕だ。役人に鼻葉をたっぷりきかせたお蔭で、増産分は課税を逃れ、売れた分の利をすっかり手にできる。売る相手は都の武大人であるから、法の網をくぐり抜けての不正がばれる気遣いはない。こうして得た金で、かねて懸案の家を建てる予定だったのだが、それよりも先に水車小屋を造るのを思いつく。狐潭から流れ出る水路に水車を設け、自身の莊園ばかりでなく、周囲からも穀物を集めて粉に挽いて売りさばく。牛で臼をまわすより効率的な水車は、唐代に入って進歩した新しい技術であるが、勝手に水車を造るのは禁じられている。かつて都の周辺で貴族や富豪が競って水車小屋を建て、穀類の高騰を招いたために、厳しい規制が設けられた。韋莊の莊園では何をしようとも、いまや役人たちは見逃してくれる。

水車小屋の建設と、初めてのお狐さまのお祭の準備が同時に進められる。

半年の間、莊園は大忙しだ。皆が生き生きと働く。

八月の戌の日、いよいよお祭を盛大に行う。

狐潭のほとりに新しく立派な祠を建てた。お狐さまに輿に載っていたいで、泰山の方士の先導で、古い祠から新しい祠に移っていた。この日の祭の主は韋莊ではなく薛未亡人である。一族を率いていくのに長幼の序と言うものは重要である。若い韋莊が何事も取り仕切るよりは、年長の薛未亡人に恭しく仕える姿の方が麗しい。以前は依怙地と思えた薛未亡人の性格も、見方を変えれば、莊園の繁栄に心血を注ぐ一途さとも見えてくる。相手構わず怒鳴っていたのは、秩序を重んじる厳格さの現われだ。高圧的な態度は堂々とした風格となる。

薛未亡人は祭に並々ならぬ情熱を傾けてきた。祠の新造を決めたのも、遠く泰山から方士を招くことにしたのも、かつてない大盤振る舞いを計画したのも、全て薛未亡人である。祠の前に社酒、社糕が山のように積まれ、豚肉と野菜を飯に載せた社飯と上等の酒が、ふんだんに用意された。この日から



動き始めた水車でさっそく粉を挽き、棗入りの揚げ餅が作られる。老いも若きも、腹の皮がはち切れるまで食べ、道に酔い伏すまで呑み、なお酒食が有り余る。祭の締めくくりは、蘭が都から運んできた珍奇な品々だ。御祝儀として全員に配られる。

「ここが懷州（かいしゅう）のようにならずにすみ、しかも、こんなにも食べ切れない食べ物と呑み切れない酒がありますのは、お狐さま、御母堂（ごぼどう）さま、そして旦那さまのお蔭でございます。一同の者は、この莊園に置いてもらえるのを感謝しなければいけませんぞ」

楊爺が酔ってしみじみともらしたこの言葉に、莊園の人々は納得する。新参者の楊爺への反感はほぼ消え、御母堂さまとは薛未亡人のこと、いまや薛未亡人は莊園の人々の母のような存在になっている。

楊爺が懷州を持ち出したのには訳がある。虢州に程近い懷州で夏にひと騒動があった。今年は黄河周辺では春から雨が少なく、麦の稔りが悪く、秋の収穫も心配されていた。夏秋の税をいくらかでも緩めていただけないかと、

懐州の人々は知事に訴え出た。知事は聞く耳持たずで、勝手な訴えは厳禁と大書した榜を役所の前に掲げた。税など到底払えそうもない民衆は知事の思いやりのなさに反発し、屋敷を囲んで氣勢を上げた。知事はびっくり仰天して逃亡した。騒ぎは大したことなく鎮圧されたが、この事件によつて、役人どもは民衆の苦しみに無頓着であることが実感された。號州のこの莊園では、そのような騒ぎもなく、このように盛大に秋の祭ができるのは、もちろん日照りにも水の涸れない狐潭があり、薛未亡人と韋莊がいるからだ。

韋莊にとつて、この祭を挙行できるところまでこられたのが、誰のお蔭かという、何と言つても、蘭と楊爺だ。二人を抜きにしては今日の繁盛はあり得ない。これから先、世の中がますます危うくなつていくなか、さらに発展させていくには、二人の力が一層必要となる。韋蘭はまだ三十前で、何の気掛かりもない。楊爺は五十を超えている。この先、十年は大丈夫としても、二十年までは頼れないだろう。いずれ楊爺の後を誰かに継いでもらわないとならないが、莊園中を見回して、その役が務まりそうな若者はいない。いま

は良くても将来を思うと少々不安なところである。

お狐さまのお祭に合わせ、蘭は、楊銀のところの次男坊の楊胆を都から連れてきた。莊園にくるのはこれが初めてで、祭を楽しんだ後に、陝州（せんしゅう）の土豪の家に婿入りをする。ちょうど良い便宜と言う訳だ。

楊爺には子どもはいないが、楊銀には三人の息子がある。肋（ろく）、胆、臆（おく）で、三男の臆だけが西市の胡人の店に雇われ、他の二人が父親の仕事を手伝っている。長男の肋は父とも伯父とも似ずに体が大きい、腰低く振る舞うさまは根っからの商売人のようである。次男の胆は、父親よりも伯父に似て、楊爺より無骨である。これで商いができるのが不思議なほどだが、陝州の土豪がぜひ婿にと惚れたのは成程とわかる。先に知っていれば莊園に呼んで楊爺の後継者にしたのにと、韋莊はしきりに残念がる。

楊胆を婿にとほしがったのは、都の色里に時折散財しに出ていく陝州の物持ちである。楊胆は、見る人が見れば、色里に巢食う他の若者とは大いに異なっていて、息子のいない豪農は養子に迎えたいと楊銀に話した。楊銀は一

も二もなく即座に決めた。多額の銀子を約束してくれたからだ。素直な胆は、豪農の娘がどのような女か全く聞かされないまま、父親の言いつけに従った。祭の後で楊胆がいつてしまうと、韋荘には、大事なものを横取りされたような気分が残り、

「あんなに良い若者がすぐ近くにいたのを、なぜ黙っていたんだい」

それほど本気ではないながらも、つい蘭を詰ると、

「俺も目がありませんでしたな。楊銀の息子なんで、商売なら使えましょうが、莊園の仕事などは無理と、はなから決め込んでいました。同じ息子でも、肋と胆では違っていたのですな。親子、兄弟でもわからないものですな」

これから先のことにまで気を回せるようになったのは、取りも直さず、莊園の現状が安定している証だろう。旅の終わりに目論んだことはほぼ実現できたようだ。

罰した三人は、それなりに落ち着き場所を得ている。伍武は命の恩人と鼻にかけて自堕落な日々をすっかり反省したようだ。酒を飲むのは正月と祭事

のあるときだけと自ら決めた。莊園を守るための自警組織を編成するとなつたときに、先頭に立ち、かつての実戦経験をもとに、若い者たちの訓練を買って出てくれた。

范執事は、息子の范実が見習いから本物の執事になるのを見届けると、洛陽郊外の先祖所縁の村へと帰っていった。主家の財産を横領した金で悠々と暮らすのだからと陰口も聞かれたが、韋莊は知らん顔をした。

慍は、誓った通りに一応のところ勉強に励んでいる。時折、莊園を抜け出して號州の町の遊び仲間のところへいつているようだが、薛未亡人が大威張りの莊園で、勉強、勉強では息が詰まるだろうと、韋莊は大目に見ている。范実と言いつけ、韋莊の妻に渡される月々の銀子を増やし、それが慍に回っていくようにさえしてやっている。

妻や子とは、相変わらず絶縁状態のままだ。それはそれで落ち着いた関係と言えらるだろう。

おおよそよいことだらけのようでも、自身の危うさが消え去ったのではない。

こうしている己が本来の己であるとは、依然と思えない。

祭が終わってしばらくすると、気が抜けたようになってしまふ。これではいけないと、己を奮い立たせる。祭を恒例の行事にすると決め、翌年もそれを目標として秋までを乗り切る。

祭が終わると前年以上の虚脱感に襲われる。このようなことが今後も繰り返されるのかと思うと、なかなか憂鬱である。折りしも冬に向かう季節、そうでなくても心は塞ぐ。事は順調すぎるほどであるのに、やっかいな話である。

**咸通十**（八六九）年正月、蘭に驚くべき儲け口が転がり込む。

皇帝の娘の同昌公主が寵臣の韋保衡（い ほこう）に降嫁することになった。皇帝は、長安の一等地である広化里（こうかり）の壮大な屋敷を韋保衡に下賜し、その邸宅を隙間なく金銀宝玉で飾らせることにする。勿論、娘夫婦の使う諸

道具も全て金銀で作らせる。宮中の倉に保管されてきた珍玩物、周辺諸国から歴代の皇帝が受け取った貢納品等をそっくり放出しても、大きな屋敷を埋めるにはまだ足りない。五百万とも五千万とも言う途方もない金が、皇帝の金蔵から出され、長安中の品々が買い付けられる。蘭はこの話をいち早く掴み、莫大な利益を得る。

ぼろ儲けをした蘭が春の終わりに虢州に帰ってくる。

「ほどほどにしないと、恨まれるぞ」

韋荘は冷やかすように言う。このごろは訳もなく気の滅入ることの多い韋荘も、従弟を見ると元気が湧き、憎まれ口を叩く。

「俺一人のために儲けているのならそうなっても仕方ありませんな。俺は、かつての裘甫と同じつもりでいます。裘甫は反乱を起こして州の倉を開き、お上が民衆から取り上げたものを配って、人々の喝采を得ましたな。俺は武器を使わずに同じことをしているだけ。どうやって民衆に返していくのかをいまは思案中です。ただで配ったのでは、あつと言う間に消えてしまうだけ

ですな。よく考えませんと、それこそ、裘甫の青虫連中のようになってしま  
いますからな」

ではどのようなことを考えているのかと問えば、二つあると言う。

ひとつは、莠を都に呼び、金に金を生ませつつ民衆を利する方法を考案し  
てもらおう。数字を好み、帳簿に通じた莠であるから、何か新奇なことを考え  
てくれるに違いないと、蘭は見込んでいる。莠は変わった弟で、このまま莊  
園でぶらぶらさせておくしかないかと韋莊は思っていたから、蘭の提案は、  
実現性は危惧されるにしても、嬉しい話である。

「利益など出なくても、そのまま金を配ったと思ったところでよいのですか  
ら、失敗はありませんな」

蘭はいつでも楽しそうである。うらやましい限りだ。

もうひとつは、商売の範囲を長安、洛陽からさらに拡大することだ、

「南方へ、あるいは西方へ、さらには唐土の外までもと広げていきたいもの  
ですな」



夢のようなことを言つて、さらに楽しそうである。莊園の中のことしか見えなくなつていた己とはひどく違ふ。

「そんなにも手を広げて何をするのかい」

「わかりませんな。始めてみないことには、その先はどうなることやら。とにかく風任せ。風はどこへと吹いておりますかな。さしずめ揚州あたりへですかな。ともかくいつてみて、それからですか。どうでしょうかな、兄貴も一緒にいく気はありませんかな」

「いけるものならば、そうしたいものだ」

本気で答えるのではない。蘭にしても、現実的なものとして口にしたのではない。旅に出られる見通しは実際にはない。二年前の秋に勃発した反乱によつて、洛陽と揚州の間の交通は途絶している。

揚州はさておき、莠の長安行きの方は、薛末亡人も賛成してすぐに決まる。それに合わせて、蘭は店を大幅に拡張し、楊銀と肋を店に入れるようにする。

楊爺は、「決して気を許しませんように」と、弟のことを蘭に言う。「ひと癖

やふた癖なくては、商売はできませんからな」と、蘭は笑い飛ばす。

莠には商売人としての癖などひとかけらもない。それで何ができるのか、韋荘には見当もつかない。

反乱とは、徐州の兵士が起こしたものだ。韋荘と蘭は、かつて南方への旅の途中で徐州から逃亡してきた劉赤虎を救った。裘甫の乱を鎮めた王式が、反抗的な兵士の皆殺しを凶った事件だったが、それは一時的な効果しかなかった。気性の荒い徐州兵士の扱いに朝廷は前々から手を焼かされ、土地から切り離してしまえばいいだろう、遙か遠くの桂州の守備に回された者もいた。守備兵は三年間辛抱すれば交替がくると聞かされていたが、一年また一年と延長になり、いつしか六年となった。交替がくる様子は一向になく、我慢の限界を越え、俺たちは俺たちの力で故郷に帰ると、龐勛（ほうくん）という男を指揮官に押し立て、道々の町を略奪しつつ故郷を目指した。

こここのところ、地域の治安を維持するための兵備は著しく弱体化する一方である。朝廷は慢性的な税収不足に苦しみ、地方官が正規の税の他に余剰金

を国庫に納めればその額に応じて出世していく仕組みを作った。地方官は余剰金を捻り出そうと苛斂追及に努め、疲弊して久しい農村は重税に耐えられず、人々は土地を捨てて流民となり、さらなる生産の減退を招いた。そこで、余剰金を生み出す手っ取り早い手段として、兵士への手当てが削られ、兵士のなり手がなくなつた。

地域の兵備などないも同然で、故郷に帰りたい一心で猛然と進みくる徐州兵士の前にひとたまりもない。龐勛一行はやすやすと長江の岸边に達し、ここで中央政府との若干の交渉がなされたものの決裂し、龐勛は船を奪つて長江を東へと下つた。長江沿いの州県は、当たらぬ神にたたりなしと静観を決め込み、徐州兵士は無抵抗で長江から大運河へと入つた。

大運河の入り口に揚州の町がある。揚州は、長安、洛陽に次ぐ第三の都会である。このとき揚州周辺の治安をあずかるのは、かつて宰相も勤めた唐朝の大物だった。その幕下の者が、揚州の面目にかけても龐勛一行をここで撃退すべきであると、崖の切り立った高郵（こうゆう）において不意打ちにする策

を提案した。元の宰相は、「討伐の勅命はまだ出ていない。わしが管轄する土地を何事もなく通つてくれれば、後は知ったことでない」と、龐勛に食糧を贈り旅の疲れをねぎらうという大した親切心を見せる挙に出た。徐州兵士は静かに領外へと出て行き、揚州の繁栄は少しも傷つかずにすんだ。

龐勛一行が徐州に帰り着くと、かねてからこの土地に渦巻いていた唐朝への不満が爆発した。唐へのあからさまな反旗を翻し、周辺地域の攻略へと乗り出した。先の裘甫の乱よりはるかに大規模な反乱となった。しかも、唐の中心である洛陽、長安に近く、朝廷はあわてて大々的に官軍を差し向けた。しかし、流民を吸収して膨れ上がる一方の反乱軍は強く、官軍は劣勢に立った。驚くべきことは、皇帝の娘の同昌公主が莫大な富を費やして降嫁したのはこの反乱の最中である。

この年の夏は、政情不安に加えて、潼関より東の地域は旱魃に襲われ、世は暗い雰囲気連鎖された。韋荘の莊園でも、狐潭の水位がこれまでになく下がり、水車を回す水量が確保できなくなつた。

楊銀の息子の楊胆が養子入りした陝州では、とりわけ日照りの被害が甚大で、多くの田圃が乾上った。早魃の状況を調べにきた役人に、楊胆の義父たちが実情を訴えると、「税を逃れようと、いい加減なことを言うな」と役人は怒鳴り、傲然と庭の木を指し、「こんなにも青々と繁っているではないか。早魃などあるものか」と一喝し、楊胆の義父を引き出して、虚偽の訴えをした罪で笞打った。役人はこれで村民どもを恐れ入らせ、袖の下をたんまりせしめようとしたのだろうが、真直ぐな気性の楊胆は、目の前で義父が理不尽に打たれるのに我慢がならず、思わず石を投げつけた。それが火をつけ、農民たちは農具を手に暴れた。役人は肝をつぶし、走って逃げた。途中の民家で喉の渴きを訴えると、楊胆が先に手を回して、下剤をませた湯を飲ませた。役人はさんざんな目に遭って都に帰り、楊胆は乱を起こした首謀者として入牢を命じられた。楊胆の義父は、倅は恐れ入って自害して果てましたと、役所に首を差し出した。それは病死した別人のもので、楊胆は楊爺のところへ逃げ込んできた。

これは反乱と言うほどではないにしても、最も治安のよいはずの長安、洛陽の周辺でも、役人への反感が募り、いつでも噴き出すばかりになっていることを、韋莊も身近に感じない訳にはいかなかった。それはそれとして、楊胆がころがりこんできたのは、韋莊にとつては、思ってもみない幸いである。陝州には返さずに、このままここに置きたいものだと考える。取りあえず、狐潭のほとりの楊爺の小屋のさらに奥に、人目につかないところを選んで小屋を作り匿うことにする。

日照りの影響で作柄はかなり悪い。お祭も仕方なく小ぶりにする。蘭だけは意気盛んで、例年通り、都の珍品を大量に買ってきて皆に配る。ぼろ儲けのお蔭だ。

祭が終わると、莠一家を伴って韋蘭は都に帰る。弟がどのようなことになるか蘭に任せる。心配はいらないだろう。むしろ、己の方こそ、蘭にいてもらわなくてはならないのかも知れない。祭の後の憂愁は、莠が消え、莊園の生産が初めて後退したことも重なって、例年以上である。

長引く反乱を唐朝は自力では收拾できなかつた。策に窮し、北方の沙陀(さだ)族の力を借りる。沙陀族とは草原の民であり、天下無双の騎馬軍団を擁する。唐朝からの要請に応え、族長の朱邪赤心(しゅじゃせきしん)が三千の騎馬軍団を率いて黄河を渡り、龐勛が暴れ回る地域に風の如くに現れる。さしもの徐州兵士もたちまち防戦一方となり、龐勛は追い詰められ、乱戦のうちに死ぬ。九月のことである。朱邪赤心はこの勲功によって、唐の皇帝と同じ李姓を与えられ、李国昌(りこくしょう)と名乗るようになる。

**翌**咸通十一(八七〇)年の春、この前の旅からすでに七年、莊園には昨年の不作の影響が残り、新年の祝いも寂しい。莠が子を連れて長安にいつてしまつてから家の中はがらんとし、家を建てる話は、凶面は前からできているが当面は先送りである。莊園の仕事は年々の繰り返しで、しかも順調に伸びるばかりではないとわかり、先を思うと気が沈みがちとなる。己の危うさは少

しずつ悪化してきたようだ。

そのような韋荘の唯一と言ってよい楽しみは弟の藹との二人の時間である。藹の朗読を聴くと心が休まる。近頃ではそれに加えて、二人して書に励んでいる。藹にはうまく書いてやろうなどという下心は全くなく、ごく素直に書くだけだ。韋荘の手もなかなかのものであるのだが、弟の書と並べると、虚飾に満ちていると見えて恥じ入るばかりになる。他人がどう評価するかは知らぬが、弟が書き上げるたびに惚れ惚れと眺め、この上ない楽しみとする。淡々とした日常に変化が生じるのは、蘭が長安から帰って、雀蛤の札が蛤側になつていくときだ。

「戦乱による傷もそろそろ癒え、世情も落ち着きを取り戻してきていますかな。それもあるいは一時的でしょうかな。次にまた何か起こるのが必定とすれば、その前に、兄貴もちよいと揚州にいつておきませんか。前に話しましたな。路銀はたっぷりあります。兄貴に何一つ不自由はかけません。簡単な仕事を少しばかりしていただければ結構。何でもありません。揚州の有名



無名の人々と、俺が言うままに交わっていたただけ。いたって簡単でしょう。

揚州への旅が、実現可能なものとして目の前にどうやら見えてきたようだ。

この前の旅は馬上に過ぎ、そのうちまた舟でいくこともあるのかと、揚州方面には足を向けなかった。二度目の旅がいずれ本当にあると期待していたのではないが、蘭との旅がまたあると思うだけで心が弾む。

そうでなくても、揚州はいかずにすませるには惜しい土地だ。商業の町だ。

揚州の発展の源は長江と黄河を結ぶ大運河である。大運河の長江側の起点が揚州で、長江以南の産物はまず揚州に集められ、そこから洛陽、長安へと運ばれる。大運河を造った隋の煬帝は揚州に惚れ込み、壮麗な離宮を建て、各地に反乱が頻発するなか、その離宮に籠って現実に目を背け、最後は側近の手で殺された。何もかも忘れさせる魔力を持った町だ。韋荘ならずとも一度はいつておきたい。

旅にいけそうだとすると、心は早くもそちらへと飛ぶ。もしも、旅という

ものを知っていなければ、さほどでもないのだろう。かつての旅の気ままさをいまの己に重ねると、何とも言い難いものがある。七年間保ってきたものが、これ以上は到底持ちこたえられないと、己で感じる。そのように思うのは初めてのようであり、実はずっとそうであったようだ。己を律していたものが崩れる。

前の旅は、現実から逃げるのではなく、本来の己を見つけるためのものだった。己を変え、大きな成果を生んだ。それが本来の己に戻るものだったのかと真面目に問えば、違っているらしいと、最初から気づいたはずだ。だからこそ強いて己を変えたのだ。

あの旅の後で、叔父や弟や楊爺が己をどのように見るのかを気にした。もしも本来の己に戻るのだったら、そのようにするはずがない。ならば偽りだったのか。莊園の繁栄には、変化したこの己を保たねばならない。偽りとまでは言わずとも、叔父や弟や楊爺に、本来の己とは言い難いものを見せ続けるのは、考えてみれば、もの悲しくもある。弟のような字が書けないのは、

己がこのようであることの証左であろうか。

ならばどうすればよいのか。もう一度やり直してみたい。本来の己を今度こそ見出すために、また旅に出たい。そのように考えるのは、実はまた逃げたいからなのか。貢挙に落ちた後の旅も結局は逃げるためだったのではないのか。いままた旅に出ても、本来の己などはどこにもなくて、いまの己をそのまま続けるしかないのかも知れない。莊園を存続させていくには他の道はない。そうであるのならなおさらだ。このいまの己でない己に、せめて旅の間だけでもなってみたい。

韋莊は旅への憧憬を膨らませる。

己のこのような心情は正直に告げられるものではない。莊園の者たちに示しが見つからない。薛未亡人にはとても言えない。いまのこの己であるからこそ薛未亡人は信頼を寄せてくれている。

さてどうしたものかと悩んでいると、ひよんな方向からうまい話がある。號州の近くに一人の方士が現れる。命数を知り悪鬼を祓うと評判である。

迷信好きの薛未亡人が強い関心を抱き、蘭が楊肋に命じて呼びにいかせる。

楊銀の長男の肋は、今回、蘭の供をして初めて莊園にきた。同じ兄弟でも胆とは随分と違い、仲も良くないようだ。兄がきても胆は狐潭の奥の隠れ場所から出てこないし、肋はそもそも胆がここに逃げてきているの知らされてさえいないようだ。

楊肋は凶体が大きい割には、ちよこまかと良く動き、なかなか如才なく、薛未亡人にすぐに気に入られた。

楊肋が迎えにいったのと入れ違いに、当の方士が自分でやってくる。廬山の愚笠子（ぐりゅうし）と呼ばれ、その名の通りに頭に笠を載せ、天を覆うばかりの大きさである。ねじくれた杖を手に、ぼくりぼくりと突きつつ一人で歩いてきて、屋敷の前に立った。齢のころなら六十余りか、長い髭が臍のあたりにまで達する。

杖を、勢い良く縦に横に斜めに振り、印を結んで呪文を唱える愚笠子を、薛未亡人は慌てて内へと招き入れる。愚笠子は周囲を見まわし、韋家に関する

る幾つかのささいな事情を言い当て、范実たちを驚かせる。

薛未亡人の前に出ると、挨拶もそこそこに、

「お心にかかる一事がござりましょう。お悩みが額に浮かびあがっております」

薛未亡人はぎくりとして額を押さえ、

「おっしゃる通り、このところ思案に余ることがありまして、頭の痛い思いをしております」

「御安心なされませ。それは最も望ましい結果をもたらすでござろう故に」  
ふわっふわっと笑う。皺に隠れてしまいそうな小さな目は見るからに温和  
そうである。

「それはまことでしょうか」

薛未亡人が膝を乗り出すと、

「御縁談でござりましょう」

愚笠子に凶星をさされ、膝を叩く。

薛未亡人は藹の嫁を探している。方々手を尽くして、しかしどれもこれも気に入らない。羨の嫁選びは大成功だったから、「藹ちゃんにも良いお嫁さんを」と、大張り切りなのだが、かれこれ二年以上、これと言った娘が見つからない。誰もが褒め称えるような娘でも、「藹ちゃんの良さはね、当世の甘やかされた娘にはわからない。変な嫁を選んで、みすみす藹ちゃんに苦労させるようなことは絶対にしませんから」と、選り好みが激しい。

愚笠子は自分の術で薛未亡人の悩みを見抜いたのかそのあたりのことはわからないのだが、薛未亡人はすっかり心服し、藹が風変わりで、しかし純朴な良い甥であることを縷々説明し、どんな娘を嫁にすべきか尋ねる。

「姓に<sub>レ</sub>が付く方であれば申し分ござりません。大地のように落ち着かれた嫁御殿をお迎えになり、御夫婦の仲はまことに結構、ともに長寿に恵まれ、御子孫はきつと官位を授かるでござりましょう」

愚笠子がふわつふわつと笑うと、薛未亡人は相好を崩し、

「我が一族もこれで終わるはずがないと思っていました。きつとお上にお仕

えする者が出るに違いないのです。それは藹ちゃんの子だったのですね。それなら、ますますしつかり良い嫁を選ばなくてははいけません。姓に「下」がつくって、ちゃんと書いておきなさい」

薛未亡人は范実に命じ、愚笠子への礼物を用意させる。

「ついでながら」

と、薛未亡人は韋莊を呼び入れ、

「これが我が莊園の主の莊で、行く末はいかなる者となるか、見ていただけましようか」

韋莊は占いの類はあまり信用しない。叔母の手前、神妙な顔を作って愚笠子に挨拶する。

愚笠子は髭をしごき、首をかしげ、右手を振るって何かを払う仕草をし、しきりに首をひねりつつ、何度も唸る。

「悪い相でしょうか」

薛未亡人が心配そうに尋ねる。愚笠子は眼を閉じ、じっと押し黙る。韋莊

が、馬鹿馬鹿しい占いに付き合っているのが苦痛になってきたところに、愚笠子は眼を開け、

「不思議でござります。このお方の命数は、いかに努めましても、お測りできませぬ。茫漠として、某の力の及ぶところではござりません」

「それは悪いことなのでしようか、良いことなのでしようか」

薛未亡人はますます心配そうに尋ねる。

「それもわかりませんぬ。ただ、某にどうやらわかりますのは、このお方の一生の大事と関わる人物が、恐らくは南東にござろうかと、それだけでござります」

「南東ですか」

韋荘が聞き返す。

「荘ちゃん、これは良く覚えておきなさい、南東ですよ」

韋荘はうなずきつつ揚州を思う。これはまことに好都合な話が転がり込んできたものだ。



愚笠子は莊園に三日ほど滞在して去り、頃合いを見計らって、蘭が、商売のために近く揚州に旅するつもりであると薛未亡人に告げる。

「だったら、荘ちゃんを連れていっておくれでないかい。揚州と言えば、ここから見て南東の方角。あの子の大事もわかり、それに、荘ちゃんは、このところずっと働きづめで、気散じも兼ねていってけるとよい」

と言う訳で、韋荘は薛未亡人の方から旅を勧められる。

そのようなことがすんだ後で、楊助が戻り、あちこちを探したが愚笠子に会えなかったと、間抜けな報告をする。どうやらこれは蘭の計略であったかと疑うが、韋荘は何も言わない。

蘭は、「旅に出られるようになったらまたきますから」と、雀の絵を表にして長安に帰る。

そうこうするうちに、鄙びた村の旧家である陸(りく)氏に良い娘がいると、の話がくる。まさしく姓に下が付くので、薛未亡人はすぐに乗り気になり、どのような娘かこっそり調べてくるよう楊爺をいかせる。山間の村に住み、

代々の読書人だが唐朝に出仕したことは一度もなく、暮らし向きは至ってつましく、当の娘は親孝行の良い子であると褒めない者はいない。

薛未亡人が大喜びなら、韋荘も同意する。弟と二人だけの時間が失われるのは寂しいが、弟も嫁を迎えて一人前になってもらわねば困る。

幸いと、この年は、春から夏にかけての気候はすこぶる順当で、いつでも旅に出られるように心積もりだけはしているうちに秋となり、莊園は豊作に恵まれ、恒例となったお狐さまのお祭がいつも通りに行われる。蘭が例によって都の品々を持ってきて、祭が終わると、「では、いきますかな」と言う。

いざ出発となつて、気がかりがあるとすれば、やはり莊園経営で、気を回せば、韋荘がいない間に、薛未亡人の二人の息子がしやしやり出てきて妙なことをせぬかと心配になる。その我がままをもしも薛未亡人が許したときに、藹と楊爺ではうまく対応できるのだろうか。

「俺の見るところ、伯母上にとつて大切なのは、怠け者の息子よりも莊園でしような。あの二人、ごそごそ動いて、きつとお灸を据えられましよう」

と、蘭は笑う。

もう一つ藹の婚禮だ。それについては、もしも旅が半年とかそれ以上に長引いたときには、薛未亡人に万事よきに取り計らってもらおうと決める。韋莊としては、旅の終わりをいつとは区切っておきたくない。

これで己のことを考えて旅に出ればよいばかりになる。何やら危なくなっている己のこの現状を、どうにかして突き破りたいと、大きな期待を抱いて甯州を後にする。

「ひよつとして、あの僧でしようかな」

「何がだ」

「あの愚笠子が言っていた、兄貴の一生の大事と関わる人物。それが、ほら、あれかも知れませんか」

「あんな出鱈目を信じているのかい」

「有難い御託宣があつたればこそ、こうして旅に出られたのですからな」

「そなたが仕組んだのだから」

「滅相もない。正真正銘の御託宣と信じねば義理が立ちませんでしょうな」

「義理でも何でも勝手に立てるがよい。で、どの僧なんだい」

「気になりますかな」

「そなたが言うから、義理でも見てやらねば悪いかと、聞いただけだ」

「有難いことですな。で、わかりませんか。兄貴の一生に関わろうと言うのですから、紫の気が立ち昇っておりますよ」

「一向に。何もない」

「あの僧ですぞ。よく見ませんと」

二人の周囲は人々でごったがえし、僧と言ってもあたりに何人もいる。

「だいたい愚笠子の言ったことに、万に一つでも、本当のところがあるとして、まだ旅に出たばかりではないか。いかに早過ぎるだろう」

「そうですね。ここで会ってしまったのは、揚州にまでいかずに終わってしま

いますかな。一生の大事はわかって、揚州を見られなくては、兄貴としてはちと残念でしような」

見回して、特に注意を引く人物はいない。ここは寺の境内であるから僧は大勢いるし、今朝は市の立つ日、多数の店が並び、大層な雑踏である。

「いったい、どの僧を見ているんだい」

「本当におわかりにならないのですか。俺がついていなかったら、兄貴は一生の大事を逃してしまうところですよ」

「いつだってそなたに助けられ、教わるばかりだ。そなたなしなら、いまでも貢奉を受け続けて、四回も五回も落ちていただろう」

貢奉のことをこうして笑って言えるのも蘭のお蔭だ。

「何事も一度やれば十分。うまくいくもよし、失敗もよし。どちらにしても、一度限り。あとは、ふわふわと風に任せて、どこか別のところへといく。生まれながらの軽薄児の俺に教わっていはろくなことにはなりませんでしょうな」

「私は風さえ読めぬ男だ」

「いや兄貴も案外と機に聡い」

「愚鈍とまではいかないにしても、そなたとは違う。悩んだり苦しんだり迷ったりする」

「確かに。その三つとも俺には無縁ですな」

「で、私の悩み、苦しみ、迷いを解いてくれるのがそなたではないとすれば、その有難い僧はどこにいるんだい。こうして話している間に、どこかにいつてしまったのではないのか」

「大丈夫、慌てることはありませんな。さっきから榎の根元にうずくまったままですな」

「榎とはどこだい」

よく見ると、塀際に一本の榎がある。遠く離れたそんなところを蘭が見ているとは思いもしなかった。

「いますでしょう。紫雲が立っていませんか」

「あの乞食坊主にかい」

「一生の大事ですぞ。ここは気張りませんとな」

「何を気張るんだ」

「まあ、近くに寄れば、兄貴の目にも、神々しい印が見えるかも知れません」

「そなたには何か見えているのか」

「俺とは無縁の僧。見えるはずありませんな」

人の流れを掻き分けて、そばに寄ると、銭を乞うためにうずくまっているのではなく、地に紙を広げてせつせと筆を動かしている。

「画僧ですかな」

紙をのぞくと、描きつつあるのは人々で賑わうこの境内の様子。

「あの店だろうか」

声を張り上げて客を呼ぶひと癖ありそうな親爺の面相が強い筆使いで写し取られている。

「どことなく閻立本（えん りつほん）の趣がありますかな」

「どこがだ」

閻立本と言えば、唐の初めに宰相になり、画業でも一家を成した大人物だ。宰相としての実績よりも、絵の方がかりが世間で評判になるのに内心忸怩たるものがあり、子孫にはその技を伝えなかつた。蘭は、閻立本の絵でひと儲けたことがあり、韋莊もそれを見た。気品溢れるその絵と、下卑た親爺を描いたこの絵では、趣が似るはずもない。

二人がいるのは汴州（べんしゅう）の相国寺。洛陽から始めた舟の旅はまだ五日ほど。相国寺は三百年以上の歴史を誇る由緒ある寺だ。創建時は建国寺と言い、唐の時代にいまの名前に改められた。相国寺の存在で汴州の町は大きくなり、近くを大運河が通るようになってから、ますます人が集まり、物が集まり、参詣者が増えて相国寺が立派になりと、汴州は相国寺とともに発展してきた。

無遠慮な蘭の声が耳に達したのだろう、僧は筆を止める。

屈めていた背を伸ばし、ゆっくりと上体を起こし、顔を二人に向ける。げ



つそりと頬がこけ、骨が浮き出ている。眼ばかりが異様に大きい。

「御慧眼、まこと恐れ入ります。愚僧はかつて閻立本の画をひとたび見ましてより、我が画業の師と仰いでおります」

痩せた顔に似合わぬ太い声だ。

このみすばらしい僧がもしも己の一生に関わる人物であるとして、この眼とこの声ならさほどおかしくない立派なものか。異様な痩せ方が見かけを老けさせているが、実際には、韋荘より少し上の四十歳くらいであるらしい。

「ただの当て推量ですな。お見受けするところ、古人を師と仰がれるのもよろしかろうが、その筆さばき、御自身が一家を成されましように」

僧は厳しい顔に変わる。

「愚僧などが大成するものですか。閻立本は宰相と画工を兼ねて求めました故に、真正の為政者にも真正の画工にもならずには終わりました。こう申すは不遜の極みながら、愚僧も師と同じく、あるいはそれ以上に、あれこれと多くを求め、何一つとして実らずに終わってしまうでありますよ」

「ならば、絵一つにとお心を定められてはいかがですか。それだけの腕前がございましょう」

僧は筆を置く。

「失礼ながら、お二人は御兄弟でしょうか」

「そのようなものですか」

「御兄弟もかくも違う。こちらのお兄さまは、本然の己がもとより定まつておられる御様子。そちらのお方は、さにあらず、得ては失い、失つては得る。これからも長くそれが続きましよう。いまお会いしたばかりで、愚僧がかく不躰なことをなぜ申すかと言えば、愚僧も同類、よつて自ずと知れるという訳です」

蘭はにやりと笑う。

「俺の当て推量へのお返しは、半ばは当たり、しかし、半ばは外れておられますな」

僧はふっと息を吐き、

「御慧眼に競う気はもとよりなく、とんだ御無礼をいたしました。愚僧の目などむろん節穴。なるほど、弟さまもしつかりしたお方なのでありますよ」

僧は韋莊の方を見上げる。

「御無礼はきちんと申さなかつた私どもの方。我らは兄弟ではなく従兄弟同士です。私がこの者より幾分か齡が上です」

韋莊がそう言うと、僧は身をそらして二人を見比べ、

「これは見込み違いもはなはだしい。落ち着き払った御様子にお兄さまとばかり思い込んでしまいました」

蘭は声を立てて笑う。

「俺が落ち着き払っていますかな。三歳上の兄貴より、風任せの俺の方が年長に見えるとは。兄貴にはもつとしつかりしていたただかないとなりませんな」

蘭は韋莊の脇腹を小突き、

「この程度の眼力では大したことなさそうですね」

と、やさやく。

都で商売を成功させた蘭にはこここのところ風格が備わり、韋荘より確かに立派に見える。莊園に居れば、韋荘も厳しい顔を作り、齡相応にも見えようが、旅に出て早くも表情が緩んでしまっているようだ。

「齡は上でも、この者に適いません。おっしゃる通り、この私、いまだ所在を定めぬ人間であります」

「改めてとくとお顔を拝見すれば、ゆくゆくは官人になられると見える立派なお方。口が過ぎましたことお詫び申し上げます」

僧は詫びのつもりか、そのように言って頭を下げる。韋荘は一礼を返しつつも、たちまち不愉快になる。官人になると言えば相手が喜ぶと思っているのか。これならどこにでもいるただの下司坊主だ。

「官人になる望みなどきっぱりと捨てました」

韋荘はぶつきらぼうに言う。僧は韋荘に鋭い目を向け、

「迷いはありませんか」

「ありません」

「愚僧もかつては勉強に励みました。その後、仏門に入り、仏の教えを聞いて心が定まるどころか迷い、山を下って町を歩き、なお迷い、かように筆を持ちましても、どう描いてよいかいつも迷っております」

韋荘は面白くない気分のまま横を向いてしまう。言葉がここで途切れたので、蘭が、

「俺には、少しのためらいもなく下ろされた筆と、見えますな」

紙の上に身を乗り出して、話の穂をつこうとするが、僧は応じず、韋荘を見上げる視線を動かさそうとしない。

蘭はことさらに咳払いをし、

「かつては勉強に励まれたとおっしゃられましたな。やはり貢挙などを目指されたのでしょうかな」

僧はゆっくりと蘭の方に目を移し、

「愚僧についてお尋ねとあらば、申し上げるのもやぶさかではありませんが、所詮、詰まらぬ話です」

「お聞かせいただければ有難いですな」

「では、手短かに申し上げましょうか。仏門を叩く者は、大方、世間でうまく生きられぬ不器用者。愚僧もその一人。よくある話です。つまりは、幼くして父母を失い、親類に預けられての窮屈な暮らしを余儀なくされれば、貢奉を受けて名を挙げ一家を興すしかないと考えるのは普通のこと。愚僧も懸命に書物を学びました。しかし、あるときあることより貢奉への思いを断ち切りまして、詮方なく出家いたしました。七歳でした。仏の説かれる真理とは何かと、法華経を日に一千字ずつ覚え、四ヶ月で法華経全てを暗誦できるようになりましたが、それはただ文字面を覚えたのみ。これと言って得られたものはありませんでした。いまに至っても同じこと。こんな詰まらぬ僧であります。お聞きいただいても興の湧かぬ世にありふれた変わり映えせぬ話です」

「いや、それでは手短かすぎますな。もっと詳しく伺いたいものですな。兄貴もそう思っていますよ」

蘭は韋莊の肩を叩く。

七歳で出家したと僧は言った。七歳のころの己は、まだ都にいて、勉強を始めたばかり。それから二十年してから、貢挙を受ける人生が本物であろうかと初めて疑った。とすると、この僧は案外なかなかのものなのかも知れない。

「よろしければ、いま少しばかり詳しくお聞かせいたいただきたい」

韋莊も、特段熱心とまではいかないながらも、そのようにいうと、僧は姿勢を改めてすぐにも話しそうになる。

蘭は、

「このような場所でお聞かせいただくよりは、いかがですか、どこか近くで、何か召し上がっていたきながらではいけませんかな。今朝はお食事はお済みでしょうか」

「あれば食べ、なければ食べぬ日々。今日も、寺のお齋に紛れ込めれば、それを頂戴しようと思案するばかり。腹の虫どもは鳴いても無駄と初めからあ

きらめております」

「ならば好都合。兄貴とは、参詣をすませてから飯と思っておりますが、順序などどうでもよろしい。外に出て、そこから適当な店を探すと思いますかな」

僧は蘭に促され、紙や筆、硯をすばやく片付け、すつと立ち上がる。背が思いの他に高い。三人並んで歩くと、韋荘も蘭も、真つ黒に日焼けした僧の顔を斜めに見上げないとならない。

門を出て少しく歩き、「酸餡」と書かれた看板を蘭が指す。

「あれが気になりますな、あそこでもよいですか」

「愚僧の好物です」

「それならうよかった。あの酸っぱい餡とは何物ですか」

「失礼ながら洛陽、あるいは都のあたりからお越しでしょうか。お言葉の様子からそのように感じておるのですが」

「虢州ですか」



「ならば酸餡は珍しいかも知れません。江南ではありふれたもの。とりわけ私ども僧侶にとりましては常食と言つてよいものです。相国寺の門前には、かように酸餡を商う店がいくつもあります」

僧は身を屈めて店の内に入る。小さな卓が十ばかり雑然と並び、ひしやげた椅子に数人の客が腰掛けている。

店の主に、蘭は、酸餡と酒を注文し、空いているところに陣取る。僧と向かい合わせにおさまったところで、酒だけでは悪かろうと、僧のために茶か野菜の羹があれば持つてくるようにと、追加する。

僧の名は貫休（かん きゅう）と言う。南方の婺州（ふしゅう）に生まれた。俗姓は姜（きょう）で、聞いた通りに、七歳で出家して始めは法華経を学び、二十歳で禅門に入り、修行を積んで山を下り、以来、二十年近く、各地を巡り歩いている。

大皿がどんと卓に置かれる。もうもうと立つ湯気の中に、赤や緑に彩色された饅頭が山と積まれている。

続けて酒がくる。蘭はまず酒だ。韋荘は酸餡に手を伸ばすがひどく熱い。貫休は指先でつまみ、慣れた手つきで、ぱっくりと二つに割る。湯気が昇る。ぎっしりと豆の餡が詰まっている。韋荘も一つ割り、息を吹きかけながら食べる。名のように酸っぱい訳ではない。豆は柔らかく蒸され、塩が効いて、かみ締めるとなかなか良い味がする。

「これはいけますな」

蘭は大口をあけてかぶりつく。羹がきたところで貫休に勧めつつ、

「なぜ絵を始められたのですかな。仏道修行の妨げにはなりませんかな」

「どうでしょうか。仏道修行とは、煎じ詰めて言えば、何が真であるかを得ようとするもの。端的に申せば、五蘊皆空。空とは何か。それを知るは難しく、五蘊は空であると観じる己がいて、それもまた空。空が空を知るとはいかなることか。一方で、画とは何か。見えた様を筆で似せて描けば形は捉えられるでしょう。形とは所詮、仮のもの。形を為す真なるものを捉えねば、画は形を似せたただの墨跡でしかありません。真を得た画とはいかなるものか。

いずれも愚僧にはわからぬことばかり。法華経を学び、禅を学び、なお真なるものは得られず、画業を始めても、やはり真なるものは得られません。つまり、画業と仏道修行は互いに妨げ合っていると言うべきでしょうか

「ならば、いかがですか、両方ともやめられましては」

蘭はぼくぼくと酸餡をほおぼりながら気安く言う。

「真なるものを言葉で言えば空。空を得ようと求めること自体、そもそも誤っておりましょうか。画は有である形を、やはり有である墨線で描きます。有によって空が描けるか。真なるものを得ようとする心も消えれば、そこにまごうかたなき空があると言えるのか。つまりは、ここに一本の筆のみがあり、我なくして画が描けるのならば、真なる画が生まれるのでありましょうか」

「俺には、何のことやらわかりませんな」

韋荘にもわかるものではないが、蘭のいつもの言い方が不躰すぎると感じる。貫休はあるいは真摯な求道者なのかと、いくらか思えてくる。

「おっしゃる通りです。愚僧自身一向にわかっておりません。わからないついでに申しますと、形は写せると申しましたが、我等がこうして見ている形とは、そもそもいかなるものか。いまあらかたなくなった皿上の酸餡。酸餡とはいかなる形のものか。見ればわかると申されましようが、山と積まれた酸餡は、どの二つを取って比べても全く同じであるとは申せないでしょう。皿の上にある酸餡の形はみな違い、で、酸餡はいかなる形なのかと問い、酸餡の形をいかに画に写すかと考えるとき、はたと窮します。酸餡と文字で書けば、どの酸餡も同じ酸餡と書けましよう。で画はどうなのか」

蘭は皿から最後の一つをつまみ取ってほおばりつつ、もう一皿を持ってこいと注文する。

「これまた何のことやらわかりません」

「愚僧の思いますには、酸餡の真の形は皿の上にはなく、別のところにあるのでしよう。簡単に言いますと、眼を閉じて酸餡を思うとき、心に内に酸餡が見えてまいります。それが、本当の酸餡の形に近いのかも知れません」

「それは少しわかるような気がしますな」

「しかし、迷妄の晴れぬ我等が見る形などは、所詮真から遠いものでありませんよう」

「酸餡の形すら俺たちには知れぬのですかな」

「がっかりされずとも、真の像を垣間見ることくらいはできましよう」

「どうすればよいのですかな」

「夢です」

「夢に見るのですかな」

「あるべき真の形、あるいは、あるべき真の世と言ってもよいでしょう。それは夢に見えるのではないかと愚僧は考えております」

「ふむ。面白い説ですな。夢をよく御覧になりますかな」

「いろいろと」

「例えば、どのような。よろしかったらお聞かせいただけますかな」

「お聞きになりますか」

韋蘭が、是非にと頭を下げると、貫休は茶を啜り、衣を直し、胸を張って身構える。何事ならんと見るに、息を大きく吸い込むや、店中に声を轟かせる。

夢到海中山　夢に至るは海の中の山

入箇白銀宅　入っていくは白銀の家。

逢見一道士　逢うは一人の道を得た人

称是李八伯　李八伯（り はちやく）と名乗られた。

蘭は手を打って大笑いする。

李八伯とは古来有名な仙人である。

「これは愉快。夢で仙界にいき、これぞ真の世の形と御覧になる禪僧がおられますとはな。いやいや、これほど愉快なことはありません。そう言えば、閻立本の絵にも十二真君像と申すのがありましてな、李八伯も描かれていると聞いたような気がしますな」

貫休は笑われても大真面目、

「ありありと白銀の家を見まして、夢から覚めて、それを筆で書きとめることならばかろうじてできようかと思いましたが、李八伯となりますととてもではありません。愚僧の筆には及びません。せつかく真の形を夢に見たのに、それを写せぬとはまことに残念でなりません」

「いま吟じられた詩はなかなかですな。画のみならず詩までなさるとは恐れ入りました。兄貴もそう思いませんか」

貫休が大声を張り上げたことで、小さな店の中、他の客の注目がこの卓に集まっている。そこに山盛りの大皿がまた置かれる。

韋荘は声を抑え、

「感服いたしました」

とだけ言う。いまの詩で、貫休が真面目な修行僧かまた怪しくなった。

「詩は幼いころに学びまして、ほんの手慰みです。お聞かせ申すようなものではありません。話の流れでつい吟じてしまいました」

「詩の腕前から察しますところ、貢奉合格もそう難しくなかったのでありま

せんかな。そうされていけば、いまごろは御立派な官人となられ、こんな小汚い店でこんな饅頭など食っていなくてもよかったでしょうにな。先ほど、貢奉への思いを七歳で断ち切られたと言われましたな。いかなる事情があったのでしょうか」

蘭は酸餡に手にし、酒を飲み、ずけずけと尋ねる。

「子ども心にも失望したからです。こんなことがありました」

貫休はまた詩を、いくらか小声で吟じる。

有叟有叟　あるこんな親爺が

暮投我宿　日暮れに我が家に泊まった。

吁嘆自語　嘆いてぶつぶつと語るのは

云太苛酷　何とも酷いことじゃ、と。

如何如何　何がどうしてと尋ねると

掠脂斡肉　脂を掠めて肉を搾るのじゃ、と。

蘭はまた手を打って喜ぶ。



「人間の脂と肉を取るのはお役人さまのお仕事ですな」

「そのような世の中の現実がいささか見えてまいりますと、貢奉を受けて役人になるのは少しも世のためにならない、儒家の教えでは人は救われないと失望せざるを得なかったのです」

「口を開けば仁だの義だの言うお偉い方が上には揃っておりながら、世は悪くなるばかりですからな。しかし、七歳でそれにお気づきになるとは、ちと早いですな」

蘭が感心して見せる。

韋荘は己の七歳にまた立ち戻ると、貫休を見直すべきかと思えてくる。

「家を出て、仏門に入りまして三十年。いまになって、実はまた、儒家の教えも大切ではないのかと思ひ直しております」

「はて、どういうことですか」

貫休はすぐには答えず、酸餡を一つ手にする。ばくばく呑み込む蘭と違い、ゆつくりと噛む。

「お二人はこの汴州にこられて、御用事がすめば虢州にお帰りになるのですようか」

「いえ、揚州に向かう途中です」

韋荘は一つの決意へと近づきつつ言う。

愚笠子の言葉は当然のことながら、信じるに値しない。それでも、旅に出たのは本来の己を知るためだ。その手がかりを虢州の南東の方角のどこかで得たいと強く願っている。ここがそうで、目の前にいる貫休が己にとって重要な人物であるのなら逃すべきでない。

「それならば、泗州（ししゅう）にお寄りなさいませ」

「泗州なら、運河を辿れば自ずといきましような」

二人は、洛陽で舟を買い、船頭を雇い、運河の流れに乗ってここまで来た。今回の旅は二人だけではない。船頭の他に、莊園の者も二人連れてくる。

「泗州に至れば、人の心を堅固にし、為すべきことを決めるのが何であるのかと、きつと考えるようにならましよう。あなたさまは官人にはならぬと

お決めのようですが、愚僧でさえ考えずにはいられませんでした」

貫休の目が韋荘に向く。ここでまた韋荘の心が揺れる。

この僧がもしも本物であれば、己の心底はすでに見透かされているのだろ  
うか。だが、たとえそうであっても、いま己が抱えているものを、この僧に  
明かすのは早計と言うべきだ。貫休が本物であるとの確信はまだない。そも  
そも己自身が己を捉えていないのに、他人にさらけ出したりできない。

「いまさら迷うものではありません」

貫休と眼を合わさずに言う。

「この兄貴はですな、貢奉にはもう懲りていますからな。で、泗州とは、あ  
の辛讜（しんとう）のことをおっしゃっておられるのですかな」

「まさしく辛讜です。愚僧がたとえ悟りを開きましても、それは愚僧一身の  
こと。愚僧のみが救われても、世に『掠脂斡肉』を嘆く親爺が無数に残され、  
それで良いのでしょうか。世を正すには、辛讜のような強い信念を持った者  
が命を賭けて働かねばならぬのでしょうか。辛讜の信念がどこからきたのかと

言えば、それは儒家の教えです」

「辛讜の奮闘ぶりは、後世に長く語り継がれましょうな」

徐州兵士の龐勛が反乱を起こしたとき、辛讜は五十を過ぎた無官の隠居だった。辛讜は揚州を出て泗州の友人を訪ね、いまのうちにこちらに避難してきてはと勧めた。友人は、このような危機に我が身だけを考える訳にいかないと、断った。辛讜はその心意気に感じ、いったん揚州に帰って家族に別れを告げ、再び泗州に戻った。途中の道は逃げまどう人で埋まっていた。人々の流れに反して北にいこうとする辛讜を、皆が口々に止めた。泗州はすでに賊に囲まれていた。辛讜は小舟に乗り込み、敵の囲みを突破して町に入った。辛讜は人々を励まし、後から後から寄せくる賊と戦った。汴州から揚州の間で、賊の手に落ちなかったのは泗州だけだった。辛讜は孤立した泗州を救うべく、二度、外に援軍を求めに出た。二度目は揚州にまで走った。通信の途絶した泗州はすでに陥落したとばかり思っていた揚州の人々は驚嘆し、辛讜に説得されて救援隊を繰り出した。泗州はついに賊に屈しなかった。

「愚僧の生きてきた四十年など、何も残るものはありません」  
貫休は静かに詩を吟じる。

茫茫復茫茫

茫茫としてまた茫茫

滿眼皆埃塵

眼にするは塵ばかり。

莫言白髮多

白髪が増えたと言ってくれるな

荃荃是愁筋

どの一本も愁いからなる筋なのか。

未達苦雕偽

世に出ぬうちは鳳の雛であると偽り

及達多不仁

世に出てからは不仁を多々なす奴ばかり。

浅深与高低

浮き沈みはいろいろあるが

尽能生荊榛

どこもかしこも茨が生える。

茫茫四大愁殺人

茫茫として四大は人を愁いに苦しめる。

この僧は本物だと韋荘は思う。

四大とは、地、火、風、水。天地を作るもの全てが人を愁いさせると貫休は歌う。

「茫茫たる四大と観じたところで、愚僧の愁いはやまず、人の世は不仁に満ち、無力な民は救われません。辛讜のような人物がいてこそ世もよくなるのならば、愚僧も七歳以前に戻って再び学ぶべきかと思ひもします」

そう言われて、たとえ貫休が本物であっても、今日はこれ以上は話すまいと、韋荘は思う。貢拳を受ける気は断じてない。そちらへと迷うようには、何としてでもなりたくない。

「辛讜のような男は滅多にいませんな。だから人々の間で語られるのですな。この世が辛讜ばかりでしたら、それはそれで窮屈でしょうかな」

蘭は残りの酒を煽り、

「もう一皿いかがですかな」

貫休が断ると、蘭はさっと立ち上がり、

「食い物もなくなりましたな。難しい話はこれくらいにして、ここを出ますかな」

あつさり終わりとする。あたかも、韋荘の心を見抜いているかのようだ。

貫休は小さな荷を抱える。

「そうそう、その絵。今日の御縁に、譲ってはいただけませんか。もちろん只でとは申しません」

蘭は銀の粒を卓の上にくろがす。

「これでいかがですか」

「手習いに描いたもの。人様にお見せするものではなく、ましてお金は頂戴できません」

「これでは御不満ですか」

蘭は銀の粒を足す。貫休は絵を差し出し、

「酸餡を頂戴しただけでも、この絵には過分です」

「俺も商人。損する金は出しません」

蘭は貫休の手に銀を握らせる。

店より外に出ると、秋の終わりの濃い色の空が広がる。高くに昇った日を浴びつつ、相国寺の門に戻る。

韋莊の心は揺れ、ここで別れて貫休と二度と会わなくなるのは惜しいような心持ちになる。愚笠子の言葉がなくても、貫休は、これからの己の人生に何かしら関わりを持ってきそうである。

「その絵で御損をおかけするのはいかにも心苦しい。不要となりましたら、揚州は含弘山（がんこうざん）にお持ちください。愚僧はそこに寄留しております。ほんの二三日、あたりを歩くつもりが、いつの間にやら汴州にまできてしまいました。何時になるかわかりませんが、いずれは揚州に戻るつもりです。銀子もお返しできましょう」

「こちらは商売。いくら儲けても返しはしませんので、悪しからず」  
蘭は笑う。

貫休は広い境内のあちらへと消える。

「順番が逆になりましたが、では、これから、市の賑わいを楽しみますかな」

「そうするか」



せつかく旅に出たのだ。あれこれの嫌なことは虢州に置いてきた。これからのことは揚州に着いて後にゆつくりと考えればよい。いまは楽しもう。

耳に、単雄信（ぜん ゆうしん）の大暴れを語る声が入ってくる。唐の太宗を苦しめた猛将だ。単雄信の投げた槍があわや太宗に命中すると言う場面。そうなっていたら、唐の世にはならなかっただろう。

二人は、毛むくじゃらの親父の熱弁に耳を傾ける。単雄信ならずとも武将の活躍する時代に再びなれば、貢挙に落ちた韋莊も、商人の蘭も、画を描く僧も、所詮は無力の存在だ。たまたまこのときばかりが楽しんでいられるのだろう。

### 人生ただ揚州に死すべし。

揚州の繁栄の象徴は九里三十歩街の絳紗灯の眩きである。その明るさは長安を遙かにしのぎ、天下の灯の三分の二は揚州にあると歌われる。

腰の細さで知られる揚州の女、その選りすぐりが集まる九里二十歩街の色里において放縦な日々を送り、後に「十年ひとたび覚めたり揚州の夢、嬴(か)ち得たり青楼薄倖の名」と杜牧(とほく)が悔悟したのは数十年前のことである。その杜牧に習ったか、揚州にきて半年余りになる韋荘は、花街のほぼ中央の一軒の妓楼に居ついてしまっている。

馴染みとなつた嫋嫋(じょうじょう)の臥所からいま起されたばかり。衣の前を片手で合わせ、片手に一枚の紙と小さな包みを持ち、細く開いた扉を足で押し表に出る。眼をしばたたかせる。真夏の太陽が道を照らしつけている。

妓楼の裏手の路地に少女の笑い声が響いている。桂児(けいじ)である。さきほど起こしにきた娘だ。韋荘が出てきたのを認め、笑いながら駆け寄る。

「何がそんなにおかしいのだ」

「ホトトギスナクコエキケバ」

口をとがらせて桂児がも(も)ごと(ごと)と言う。途中でおかしさがこみあげてきたのだろう、嘖き出し、けらけらと笑う。

朝から元気なことだ。桂児は嫋嫋の部屋付の少女でいつも陽気。湿りがちな嫋嫋とは好対照である。

「いまね、あのお坊さんに教わったの。何だかわかります」

「いや」

桂児はくりくりと目を動かし、口をぱつとあけ、もごもごを繰り返し、途中までできて、腹をよじって笑う。

「何のことだい」

「日本の歌なんですって」

外の明るさにやつと慣れた韋荘の目に、路地の向こうの僧の姿が見える。韋荘は衿のあたりを整え、丁寧に会釈する。僧は笠を取り会釈を返す。

僧の名は敬竜（けいりゅう）。今朝ここにくる約束になっていた。日本から渡ってきて二十年になると言う。眼が細く、鼻が低くつぶれ、口が斜めに歪み、痩せた貧相な僧である。

ひと月ほど前に韋蘭がどこかからか連れてきて少しばかり話をした。仏道

修行のために唐に渡り、五台山で数年を過ごし、長安を始め各地を巡り、い  
ずれ日本に帰ろうとしていながら、良い船に巡り会えず、歳月が経つままに、  
龐勛の乱に巻き込まれてさんざんな目に遭い、老いととも望郷の念に駆ら  
れてといった話だった。「それなら、俺が帰れるように計らいますかな」と、  
蘭がその場で安請け合いをし、どこでどう見つけてきたものか、杭州で誰某  
に頼めばどうにかなりそうと、杭州行きの船に敬童を乗せてやる算段をした。  
その船が出るのが今日で、乗る前にここにくるようにと蘭が敬童に伝えてい  
た。ところが、蘭は朝早くに出てしまい、韋荘が起こされて代わりに会うこ  
とになった。

「ホトトギスって杜鵑のこと。知っていて。日本では名前は違っていても、  
涙を振りしぼって鳴くのは同じなんですって。この歌はね、故郷を偲ぶもの  
だって、いま教わったところなの」

僧の方へと歩む韋荘の横で桂兒はまた呪文のようなもごもごを唱え、やは  
り笑う。

「笑ってばかりでは失礼だぞ」

韋荘はたしなめるが、桂児の毬を転がすような声につられ、自分も笑っている。

「無邪気に笑える子どもはまことに幸せでございます」

敬竜も微笑んでいる。

「大人になってみると、世の中と言うのは、心から笑えることの少ないものと知れます」

「愚僧にも遠い昔にはこの娘のように笑える日々もございました。齢でございますでしょうか、しきりと昔が懐かしまれ、つい日本の歌などを口ずさみ、せがまれるままに教えてしまいました」

敬竜の顔は深い皺に刻まれる。貧相と見えたのは長い歳月の労苦のためか。ようやく日本に帰れそうになった敬竜にどのような思いがあるのか。

まだ笑っている桂児とて、本当に笑えることは多くない。このような色里に好んでくる娘はいない。龐助の乱がなかったならば、もっと朗らかな笑い

声を、父母たちに聞かせていたはずだ。

不意にこみあげてくるものを韋荘は押し戻し、さらぬ体で、紙と包みを差し出す。

紙は送別の詩。包みは昨夜のうちに蘭が用意した。中身は銀子だ。詩は蘭が書けと言うから書いたままで、あまり興が乗らず、平凡なものだ。「あの僧が無事に日本に帰り着き、あちらの国王に召され、この詩が話の種になるかも知れませんのに、これでは、唐人も近頃は詩が下手になったと言われかねませんな」と、からかわれた。いざ渡そうとして、書き直したくもなるが、いまさら仕方あるまい。

敬竜は詩の返礼であろう、短く経を唱え、何度も礼を言って去っていく。

「あのお坊さん、遠い国に帰れるかしら」

桂兎がさつきとはまるで違うしゅんとした声で言う。

「そう願うしかないだろう」

敬竜の後ろ姿が細い路地の彼方に消える。

色街の朝は遅く、僧の他には道ゆく者はいない。何ヶ月後かには、敬竜は日本のどこかの道を歩いているのだろうか。そうなったとしても、無事に帰り着いたのを、韋荘には知る術がない。

敬竜とはこれで二度と会うことはないだろう。それなのに、どうして親切にするのかと蘭に尋ねたところ、「いずれこれも商売に発展するかも知れませんが、揚州に小さな店を開いたばかりで、まさか次は日本にと夢想しているのかと聞くと、「とにかく先のことはわかりませんからな」と、蘭は悪くなるよりは良くなるのを常に考えるようだ。

韋荘は嫋嫋の部屋に戻り、慌しく着替える。もう一つ蘭に言われた用事がある。寝過こしたために急いで飛び出さないとならない。

「お茶もお飲みにならず、もうお出かけでございますか」

奥の部屋で身じまいを終えた嫋嫋が出てくる。盆を捧げ持つ桂兎がついて  
いる。

「あいつが大事な用だと言うのだ。大したことではなくても、あいつに言わ

れたことはやるといふ約束でこの旅に出たので、仕方がない」

「あなたさまは大事な御用があつて揚州にお越しなられたお身にございませぬ。それをないがしろにしてはなりません」

嫋嫋は伏し目がちに話をする。いつもの癖だ。

「用がすんだら、揚州からさっさと帰つてしまつと、気にしているのだらう」

「いえ、そんなことは」

嫋嫋は押し殺したような小さな声。

「心配するな。私が揚州にきたのは、どのような用のためでもない、いまは思っている」

韋荘は嫋嫋の手を取る。嫋嫋はうつむいたまま黙っている。

「何のためかと聞かぬのか」

嫋嫋は何も言わない。桂兎は韋荘と嫋嫋を交互に見上げ、

「姐さん、何とかお言いになつたら」

「そなたは旦那さまにお茶をお勧めしなさい」



嫋嫋は桂児に向かって少しきつく言う。

「聞こうとしなくても、私は言うぞ」

「おやめください」

嫋嫋は韋荘の手を振りほどく。

「姐さん」

桂児が嫋嫋の袖を引く。

「私が揚州にきたのは、むろん、そなたと会うためではないか」

韋荘が言うと、嫋嫋は身を翻す。その拍子に桂児が片手で支えていた盆がひっくり返る。茶碗が音を立ててころがる。

嫋嫋は奥の部屋に戻ってしまう。

韋荘は嫋嫋を追おうとして、すでに時刻を過ぎていることを思い出し、床を拭いている桂児に、

「後は頼んだぞ」

と、言い置いて部屋を出る。

このところ、ちよつとした拍子でこのようなことになる。韋莊が揚州にいるのも長くないということが、二人に影を落としているのだろう。虢州を秋に出て、冬から春、そしてすでに夏になっている。いつまでも旅は続かない。

裏口ではなく、妓楼の正面の口に立ち、嫋嫋の養母たちの見送りを受ける。蘭が手配しておいてくれた小者を連れ、ちよつとした荷を担がせる。

外に出ると、日が高くなっている。これは急がないといけない。

この九里二十步街は、朝に見るものではない。夜の明かりのもとでこそ、心が浮き立ち、妖しげな情が湧く。朝日はそぐわない。

揚州にきて妓楼を我が家のようにするとは全く思ってもいなかった。貢奉に落ちた直後に、長安で放蕩を尽くし、これで一生分の遊びは終わったと思っていた。後味の悪い虚しさばかりが残った。その後、長安や洛陽で、蘭とともに酒宴に招かれたり招いたりし、宴席に妓女が侍り、妓女と戯れもしたが、それは座を盛り上げる必要上で、女の色香に心を動かされたりはしなかった。そのような年齢ではなくなったのだと思った。蘭はもとより不思議な

男で、女に関心のあるそぶりはついぞ見せたことがない。

九里三十歩街の繁昌は、徐州の兵士たちに酒食を贈った例の軟弱な元の宰相のお蔭である。反乱が勃発してから、汴州と揚州の間は大混乱に陥り、賊に追われた人々が逃げ込んで揚州の人口は膨れ上がった。大運河の航行が途絶えたために、江南から集められた物資が揚州に滞留した。乱がおさまると、復興に向けて揚州では何もかもが一斉に動き出し、異様なまでの活気に溢れた。その熱がまだ冷めやらぬところに、韋莊と蘭は揚州に到着した。九里三十歩街はかつての全盛期でもこれほどの賑わいではなかったと古老たちが言うほどだ。

嫋嫋と初めて会ったのは春先。ある貴人を招いての宴席だった。貴人に贈る即興の詩を思案していると、胡琴の音に誘われてふと目を上げた。これまでに経験したことのない感情に、突如として襲われた。弦の前で細い腕が交差し、ゆらりゆらりとからだ揺れていた。女の顔があり、その眼を見るや、胸が激しく締め付けられた。女の眼差しに釘付けとなり、考えていた詩はす

っかり忘れてしまった。それから後の韋莊は心そこにあらずで、貴人の饗応の方は、蘭のそつなさによつてどうにか失敗を免れた。

三日後に、蘭の手筈で、胡琴の女と再会した。嫋嫋との名を知り、数日後の三度目のときに、嫋嫋の身の上を聞いた。父は徐州に近い町の胥吏であったが、不正を嫌う父は人に逆恨みされ殺された。母も早くに死んで、一人きりとなった幼い嫋嫋は伯母に引き取られた。貧乏な伯母は嫋嫋をこき使い、嫋嫋の顔立ちの良さから、まとまった金にするのが得と、売り飛ばした。流れ流れて泗州（ししゅう）の妓館で成長し、初物好きの老官人によつて水揚げされた。龐勛の乱が起こり、妓館の主人と逃げる途中で賊の襲撃を受け、一行は散り散りになった。嫋嫋はいったんは賊の手に落ちたものの、官軍に救われ、揚州の妓楼に身を落ち着けることになった。

韋莊は揚州にくる前に嫋嫋のいた泗州に立ち寄った。汴州から舟で南に行くと、戦乱の跡と思しき破壊された集落、焼け落ちた家並み、崩れた城壁などが散見されるようになった。次第に人の気配さえ消えた。泗州は必死の防

戦によって賊に負けはしなかったが、随所に戦の生々しい痕跡があった。人々の顔に長い籠城の疲れが色濃く残っていた。相国寺の市のような賑わいは、汴州から南にはどこにもなかった。泗州を離れて揚州に近づくと、戦乱の影響は順次薄くなり、人々の顔に活気が見え出し、揚州に着くと異様な熱気の渦が巻いていた。

揚州での日々が始まると、韋荘は旅の途中で見たことも、虢州の莊園に置いてきたことも、すっかり忘れた。いまここにきているからこそ得られる楽しさのうちに毎日を過ごそうとし、莊園で作っていた怖い顔を消し去った。こうしているのが本来の己かも知れないと感じるようになったときに、嫋嫋と出会い、韋荘は三十五歳にして、己の心が一人の女によって決して戻ることはならないところへと運び去られてしまうのを初めて知った。この薄幸の女の運命を、己が引き受けてやらなければならないと強く感じた。

蘭は、「客の気を引くためなら、どんなことでも言いますからな」と、嫋嫋の話にまるで同情せず、かと言って、嫋嫋に溺れていく韋荘を止めようともし

しなかった。何事も風任せをよしとする蘭である、惚れてしまったからには仕方ないというところなのだろう。

こうして春から夏へと季節が移り、いつまでこのままでいられるかとの不安が生まれ、韋荘の執心が強まった。

それでも、韋蘭との約束は果たさなければならぬ。

**堂**とは名ばかり、地面に柱を立てて、あり合わせの材料で四周と上を覆った、掘つ立て小屋が立つ。入り口に垂れる布きれをめくると、暗い内側から、むっと何とも言えぬ臭気が溢れ出てくる。

荷を手に韋荘は一人で入る。一本の蠟燭がぼんやりと燃える。あちこちの隙間から漏れてくる光によって、地面に蓆を敷いただけの上に、膝と膝とを突き合わせるようにして大勢の人が座っている様子が見えてくる。

急いで歩いてきたので韋荘の背はぐっしりと濡れている。その上、締め

切ったこの小屋の内は、人々の吐き出す息に蒸され気持ち悪いほどに暑い。すぐにも出たくなるが、韋莊が入ってきたのを見つけた小坊主に案内されて、小屋の中央へと導かれる。

左右の人々を押し分けて韋莊が座を占めたのは、蠟燭が燃える壇のすぐ下。奥にもう一段高い壇があり、仏像が安置されている。どうやら間に合ったようだ。

待つことわずかで、小屋の別の口が開き、光が差し込むのと一緒に一人の僧が姿を現す。驚くばかりの堂々とした体躯、からだを折り曲げて入ってくる。ざわついていた小屋の中が静まる。入り口が閉じられ、小屋はまた暗くなり、衣擦れの音を立てて進む僧の姿ばかりが浮かぶ。頭が天井を支える梁に当たりそうだ。僧は仏像の前に座し、衣を正し、深く拝する。しばらくもごもごと唱え、再び仏像を拝し、そして人々の方に向き直る。

近頃評判の仏蕃ぶつばんという名の僧だ。韋莊は、蠟燭に照らされる顔をすぐ前に見上げる。一言で容貌魁偉。長く幅のある顎がそり上がり、薄い唇

が左右に裂けるほど広がり、中央に居座る鼻は高くかつ巨大、眼窩は井戸のように深く窪み、その奥にこの薄明かりの中でも爛々と輝く緑の瞳があり、眉は太く、左右の耳は肩にこぼれるまでに長い。長安や洛陽、それに揚州にきてからもいろいろな胡人を見たが、これほどまでに強烈な顔にお目にかかったことはない。

「仏蕃はゆつたりと口を開く。

「今日ここに皆さまと仏縁を得ましたはまこと幸い、愚僧、拙き身ながら仏道を広めんと志、このたび揚州に参り、御加護有難くもこの一字を得、かく皆さまにお話しさせていただきますは、思えば古き所縁のなきにしもあらず、そもそもは何故かと、これより説き明かし参りましようほどに、どうぞお耳をお貸しただければ幸いにござります」

奇怪な顔に反して声は美しく暢やかで、小さな堂の内に良く響く。口調は相国寺の市にいた講釈師に似て、いささか僧らしくない。

チンチンと鉦を鳴らし、頭を下げる。仏蕃がたちまち揚州で評判になった



のは、この心地良くも巧みな話術による。

「愚僧はかの天竺に生まれまして、これよりお話しいたしますは、遙か遠く唐への旅に出ますまでの物語」

笏で机を叩き拍子をとる。講釈師の技と同じだ。

何を話し出すのか、その調子の良さに、興味を惹かれるものの、とんだいかさまな胡僧もあったものだ。呆れはしても、これくらいでなければ、町の愚民たちを連日大勢集められはしないのだろう。

己のことを語るかと思わせて、仏蕃の話はいきなり大昔に飛び、仏陀が出家して悟りを得るまで、面白おかしい説話の連続、信じるに足りないと思いつつも、つい暑さを忘れて聞き入る。

鉦を鳴らし、話はまた一転、唐土へと飛ぶ。開成年間に名を知られた金剛仙こんごうせんの一代記。それは三十年ほど昔、大唐の泰平の真只中である。

金剛仙とは天竺からきた僧、清遠峽山寺に住み、呪物を良くすると、そのころ大した評判であった。金剛経を唱えて靈力を発揮し、最も有名なのは巨大

な毒虺の退治。ここにきて仏蕃の語りにはいつそう熱が入り、山場では太鼓も鳴らされる。

堂内の人々は仏蕃の語るがままに身を揺らし、胸を高鳴らせ、息を呑み、喜び、泣きもする。

仏蕃はひと調子落とし、金剛仙が船を仕立てて南の海へと乗り出し、天竺に帰りゆく段。唐においては金剛仙が船出したところまでしか知られていない。仏蕃によれば、あまたの危難の末に本国に帰り着き、その金剛仙に仏蕃は弟子入りし、金剛経の奥義を授かり、師匠と同じく唐土の民を救済せんと天竺を発つのである。

嘘か真かわからぬが長い話が終わる。

仏蕃は一礼し、向きを変え、仏像を拝し、金剛経を唱える。これまた美しい声だ。皆が聞き惚れる。

「那謨婆伽跋帝、鉢喇壤、波羅弭多曳、唵伊利底、伊室利、輸盧駄、毘沙耶、毘沙耶、莎婆訶」

最後の真言で声はばたりと止み、鉦を鳴らし、仏像を数度拝する。人々もそれに習う。

静寂の中、仏蕃は人々の方に直り、壇の下に居並ぶ人々を順に見て、韋荘に目を止め、さっと腕を伸ばし、

「どうぞこちらへお進みなされよ」

壇の真下を指差す。韋荘の膝の一步前の場所だ。

脇に置いた荷を手を、中腰で前に出る。小坊主が壇の上に香炉を置く。仏蕃は仏像の方に向き、もう一つ置かれた香炉に香をくべて合掌する。

「どうぞ同じように」

仏蕃に促されるがままに香をくべる。白い煙が昇る。その向こうに仏蕃の頭がある。天竺からきたというのは、容貌からして嘘ではないにしても、金剛仙の弟子とは荒唐無稽すぎよう。こんな派手な法話をする僧はかつて見たことも聞いたこともない。

韋荘は持参の包みをほどき、中より紙にくるんだものを取り出し、頭上に

掲げ、壇の上に載せる。かなりの重さの銀だ。蘭が「きつと役に立ちますな。十年後か二十年後かは知りませんが」と言うので、朝の法話に間に合うよう急いできたのである。こんな僧に銀を渡して何になるのかと思うが、蘭が言ったことをするのが旅の約束である。

胡人の年齢は読みにくい。声の調子からしてまだ三十前だろうか。この若さでこれだけの人々を集められるのは、それはそれで尋常な僧ではない。

仏蕃は左右の袖を高く上げて横に向く。札の山がある。一枚を取り上げ、真言を低く唱え、「やあ」と発してから、札を手に立ち上がる。壇を下り韋莊の額の上に掲げる。韋莊は拝礼し両手で受け止める。

薄明かりに目を凝らせば、「一切有為法 如夢幻泡影 如雲亦如電 感作如是觀」と、金剛經の一節が記されている。

「今日ここにこられたのは何かお悩みがあつてのことでしょうか」  
そう問われたならばこうと蘭が言っていた通りに答える。

「このたびの戦乱を見ましてより、これからいかなる世へと変じ、いかにし

たら一族を養っていけるのかと、案じない日は一日たりともありません。お上人さまのお導きで、正しい道をお示しいただけますならば、これ以上に有難いことはありません」

深々と頭を下げる。煎じ詰めればこのようなことを韋荘も思ってはいる。

徐州兵士の反乱は沙陀族の力でおさまりはした。ここ揚州はいまのところは活況を呈している。しかし、反乱が起こったそもそものところは変わっていないのだろう。いずれまたどこかで三度目の反乱が起こるであろう。虢州にも火の粉が飛んでくるかも知れない。楊銀の息子の胆が役人に反発したあの事件だって一歩間違えばどうなっていたかわからない。いまの唐土にはそのようなことがそこかしこでありふれている。

韋荘の荘園はしばらくは調子よく発展してきていたが、昨年になって初めて陰りが出た。田疇を見習って、たとえ唐が滅びようとも荘園を保っていきたいと、蘭とともに努めてきた。反乱の跡を見れば、現実には遙かに厳しい。巨大な暴風に巻き込まれたならば、ちっぽけな荘園を保てるとは思えない。

だからと言って初めからあきらめるのでは情けない。蘭は揚州に店を開き新しい展開を計画している。敬竜の帰国を援助し、この仏蕃と縁を結ぶのも、何かしら意味のある試みなのであろう。

仏蕃の緑の瞳が韋荘に向く。

「愚僧がお見受けするところ、あなたさまは、幸いにも多くを手になさっておられますよう。違っておりましたようか」

「確かにささやかなものならございます。それが悩みのもとでございます」  
「それがなくなるのを憂うのと、なくなるのを憂うのと、どちらがましであるとお考えになりましたか。いかにささやかとはいえ、持つ者は持たぬ者が羨望を抱くのを恐れねばなりませんまい。羨望はいともたやすく怨恨と変じましょう。違っておりましたようか」

国を滅ぼすのは嫉みだと、蘭が言っていた。何も持たない者には失うものはない。この小屋の内で韋荘一人だけが嫉みを受けるような立派な服装、ここにはそぐわない存在である。

「戦乱においては財がある故にかえって命を落とし、財にいかにか執着しようとも死んでまでは持ち続けられません。財が命を守るに役立たぬとすれば、いかに我と我が一族の安寧を保てば良いのか、それが私の悩むところです」

「財は己の仇。現世においては人に怨恨を抱かせ、来世においては無間地獄への道しるべ。持って良いところは何ありません。違っておりましょうか」

「ならばいかにしたら良いのでしょうか。このお札のお力におすがりすればよろしいのでしょうか」

「お捨てなさることです。全てをです。財を捨て、俗世の縁を捨て、身一つをも捨て、この札のみの己とおなりなさい。それによって御身が救われるだけではなく、親類縁者も、子々孫々も救われましょう」

「有難きお言葉にはございますが、愚夫愚昧の私には及ばぬところです。財を捨てる一事にしても、ささやかなものでも頼る者は多く、捨てるのは不可能です。決して財を貪るものではありません。真実、救いを求めています。しかしながら、財を捨て、俗世の縁を捨て、身一つをも捨てるとは、いかんと

もし難いと申し上げるよりありません。このように申す身は救いようがないのでしうか」

「この愚僧を御覧いただきたい」

仏蕃は声を大きくする。改めて仏蕃を見上げる。魁偉な顔立ちは真の求道者であるのか、似非坊主であるのか。

「財を捨て、俗世の縁を捨て、身一つをも捨てる」と申したことを、この愚僧自身できていますしうか。皆様方はどうお思いでしうか。いずれの方々も首をかしげられましう。どうですか。違つておりましうか」

「お上人さまにおかれては決してそのしうな」

そう答えるべきと期待されている通りに韋莊はしう。

心の内では全く別のことを考える。

莊園を捨て、一族の者を捨て、ただ嫋嫋と二人で生きるのはどうか。それができてこそ嫋嫋を思ふ心の証しとならう。

このしうな思ひは誰にも言えない。



「一生かかってもこの愚僧にはできませんまい。それ故に、ひたすら金剛經を唱え、お札を配るばかり。捨てられぬのなら、他の何かを為さずにすむ一つを為すしかないのです」

仏蕃は不可思議な表情で眼を閉じる。

韋莊は、さきほどの嫵嫵との小さな諍いを思い返す。どうして素直になれぬのか。

まやかしの僧との意味のわからぬこのような問答はここらで打ち切るのが潮時であろう。蘭から頼まれた通りの一言を告げる。

「私などは、このお札の靈力におすがりするよりありません。私の真実の心の証しに、お上人さまのお許しがいただけるとしたら、一つの堂宇を御寄進申し上げたいと考えております。お受け取りいただけますものでしょうか」

仏蕃はうつすらと眼を開け、合掌して韋莊に頭を垂れる。

「御仏のお心のままですごいませう」

「有難きことにございます」

韋荘は深く頭を下げる。

ほっとする。蘭との約束はこれで果たせた。

仏蕃が食わせ坊主であることもはつきりした。捨てる捨てる立派そうに言いつつ、堂の寄進は喜んで受けるのだ。仏蕃が立派なお堂におさまれば、この話術で多くの人を集め、大した尊者と崇められて、何かの加減で蘭にうまい儲けがころがりこんでくるということになるのだろう。

**小屋**の外は目も眩むばかりの光に溢れる。

供人に小銭を渡して帰らせる。蘭の新しい店で雇った少年だ。莊園からは二人を連れてきた。范家と伍家から一人ずつで、范家からは先に自殺した老執事の孫の范完(ほん かん)、伍家からは呑んだくれの伍武の三男の伍伝(ごでん)だ。范完は、杖で撃たれた范執事に代わって屋敷に入った范実とは曾祖父

を同じくする。二人を比べて范完の方が信用できると蘭は言っていたが、父親の名誉回復の機会を与えてやろうと、韋荘は先に范実の良い仕事を与えた。伍伝は十八歳で兵士になり二十五歳で莊園に戻った。その年に妻を持ち、長男の伍七が十歳になる。伍伝は腕が立ち、荒っぽいことを経験してきた割には、本来の実直さを失わず、なかなか機転もきく。范完と伍伝は年齢が近く仲も良く、揚州の店はいずれこの二人に任せて長安に戻れると蘭は考えている。

蘭が帰るときには韋荘も帰らなければならない。いまの己を突き破って、本来の己を今度こそは得ようと出てきた旅である。それでいまはいったい何をしているのか。

韋荘は手をかざす。陽が明るすぎる。

日陰の道を選んで町の中心に向かってしばらくいくと、どこからともなく蘭が現れる。

「首尾はいかがでしたかな」

蘭は例によつて医者のみなりだ。知らぬ土地で信用を得るのに都合が良い。

「言われた通りにしてきた。土産だ。有難がるがいい」

仏蕃の札を鼻先に突き出す。蘭は大袈裟な身振りで押し頂く。

「これさえあれば地獄に落ちずにすみますな。有難いですな。金剛経の結構なお話をたつぷり聞いて、せっかく頂いたこのお札を無造作に人に与えてしまふとは、兄貴もとんだ罰当たりですな。俺がこのお札のお蔭でやすやすと極楽にいき、兄貴が地獄に墮ちても知りませんぞ」

「似非坊主だ。札に何の力があるう。堂を寄進するとは酔狂も程があるう。この後、何とかなるのかい」

蘭は札を懐にねじこみ、

「何ともなりませんでしょうな」

「そなたのすることは訳がわからん。今日に始まらず、いつものことだが」

「俺の持っているのはお上からせしめた余り金。自分のものにしては人に恨まれるだけ。それでも捨てるのはさすがに惜しいですから、使うに越

したことはありません」

「あの坊主が捨てる捨てると言うのを、そなたも聞いたのかい」

「いつも言うのは同じ。今日は、女色を戒める法話もありましたかな。兄貴のために特別に」

「そんなものあるものか」

「では、仏蕃も大したことありませんな。兄貴が陥っている煩惱の深みがとんと見えないのでは」

「愚にもつかん食わせ坊主だ」

「案外、愚笠子が言っていたのは仏蕃かも知れませんな。もう一回、堂に戻って本当のことを言ってみてはどうですか。迷妄を払ってもらえましょう。この札、返しましょうか」

「いらん。それより、どこぞで喉を潤し、腹も満たしたい」

仏蕃の小屋で蒸され、この陽射に焼かれ、喉がからからである。急いで妓楼を飛び出したから朝飯もまだだ。

「ひねくれ者の俺でも、それには、異議を唱えませんな」

酒旗の並ぶ一画を目指して一本の水路を渡ろうとして、二人は橋のたもとの人だかりに行き会う。

ここは人がいつも集まりやすい場所だ。薬でも売るのが、芸を見せるのか、あるいは喧嘩か、いずれにしても良くあることと行き過ぎようとする、蘭が袖を引く。

「こいつは変わっていますな」

蘭は平気で人を押しつけ、ぐいぐいと最前列に出る。韋荘もその脇に引き出される。

人垣の中がぼつかりとあいていて、中央に一人の男が奇妙な格好でいる。床几の上に仰向けに寝そべり、天に向かって両足を突き上げている。尻が丸出いだ。

「やっ」

男は声を出す。足先を左右交互に回し、大きな輪を描く。足の片側の指に

は竹を削った板、もう片側の指に筆が挟まれている。

「やつ」

真つ直ぐ伸ばした足を振りおろす。床几の斜め前に台が置かれ、その上に硯がある。筆先がぴたりと硯におさまり、たつぷりと墨を含む。

「やつ」

声と同時に足をぐいと上げる。筆先が竹の板に向く。足を上下斜めに動かし、どうやら板に何かを描いているようだ。韋荘の立つところからは板の背しか見えない。

「やつ」

声もろとも、男は床几の上で身をひねって板を観衆に向ける。

「ほう」

観衆が唸る。

虎だ。なかなかうまくできている。足だけで、しかもこの早業で描いたとは思えない。

やんやの喝采が静まるのを待ち、

「ご注文の虎のできあがりにございます」

男は身を起こす。諸肌脱ぎの上半身が汗で濡れている。日焼けした精悍な顔立ちはまだ若く、せいぜい十六、七か。上体を後ろで支えていた肘が自由になって袖から両腕が垂れるのを見れば、手首から先が両側ともにならない。

「これはたいした技だ」

韋荘はつぶやく。

少年の近くに立っていた男が歩み出て、少年の足から絵を受け取る。

「いやあ、こいつはよくできている。手を使ったところで、こううまくは描けない」

しきりにうなずきつつ、床几の下にある壺に銭を放り投げる。

「まことに有り難うございます」

注文主が人の輪に戻ると、少年は、

「さあさあ、次のご注文はございませんか。何でも結構。お気に召さねばお



代は頂戴しません」

声を張り上げる。群集は顔を見合わせる。少年の芸は見たいが、自分で銭は出したくないといったところだろう。

「兄貴、どうですか、何か注文を出しませんかな。嫋嫋に持っていてやったら、きつと喜びましような」

「頼みなければそなたが勝手に頼めば良い」

「では、いまのは虎でしたから、こんどは人物をいきましようかな」  
蘭は、

「王昭君（おうしょうくん）を描いてくれ」

と、叫ぶ。韋荘は横で笑う。

「あの子どもには難しすぎないか。王昭君がわかるかい」  
少年は蘭の方に顔を向け、

「これはこれは御立派な身なりのお医者さまからの御注文。有り難うござい  
ます。承知つかまつりました。西へと赴く旅路の王昭君を、これより描いて

みせまする」

「あやつ、王昭君を知っておりましたな」

少年は新しい竹の板を足の指の間に挟み、床几の上に寝そべって先ほどと同じ姿勢になる。

王昭君とは、漢の皇帝の命で、皇族の娘と偽り、西方の蛮族の王に降嫁した薄幸の女性。昔からよく詩に詠まれ、画にもよく描かれる。

少年は虎と同様にたちまちのうちに描き、

「いかがでございましょうか」

身を起こし、板を蘭の方に向ける。

ひと際大きな感嘆の声が広がる。蘭と韋荘は前に進み出て、絵を間近に見る。濃い墨、太い線で、憂いのなかにも気品が漂う王昭君が描かれ、並の大人の画工の適わぬ出来だ。

「みごとですな」

蘭は画を両手で掲げ、ぐるりと観衆に見せる。やんやの声が掛かり、少年

ははにかんだように笑う。蘭は錢をたつぷりはずんで壺に投げ入れる。響いた音で額を推測した観衆がどよめく。

二人が人々の輪に戻ると、少年がまた群集に向かって次の注文を促し、

「関公（かんこう）」

と、叫ぶ声が出る。

「もう一つ見ていきますかな」

蘭がそう言うので人々の輪に残って見守ると、少年は仰向けになって足を上にさっと伸ばす。人々の視線は自ずとそこに集中する。するすると小柄な男が地を這うようにして出てくる。少年の足の下をくぐって腕を伸ばし、壺に手をかける。あつと観衆が思う間もなく、小男は壺を抱えて走る。

気配に少年が起き上がる。人々が騒ぐ。小男は、右に左に跳んで人の輪を抜け出ようとする。少年が大声を上げ、足より板と筆を振り捨て、素足で駆け出す。そこへ、土煙を上げて棒が滑ってくる。少年の脛に当たり、ごろりと倒れる。

「悪い奴が組みですな」

先に逃げた小男は人の輪の外に飛び出し、一目散に走り去る。その正面に裸の大男が立ちはだかる。

「邪魔だ」

小男は体当たりし、肘でぐいと裸男の腹を払って突き進もうとする。

「邪魔とは何だ。ぶつかってきたのはおまえだろう」

裸男は腹をどっしりと小男に寄せる。腰に汚い布きれが一枚縛りつけてあるだけで、年の頃なら二十歳前後か。

「どかないか」

小男は押しつけようとする。裸男はぐいと襟首を掴む。真っ黒に日焼けしたからだに隆々と筋肉が盛り上がる。

「何をする」

叫ぶ小男の足が地面を離れると見えて、そのからだは宙を飛び、背中からどろどろと地面に落ちる。小男の小脇から壺がころがる。別の男が現れ、その壺

を拾う。

「おまえが仲間だな」

裸男は大股で歩み寄り、男を蹴り上げる。小男が地を這って棒を拾い、裸男の背後から思いつきり打ちかかる。裸男はびくともせず、振り返りざまに小男を踏み潰す。

もう一人が立ち上がった、

「何をしやがる」

と、叫ぶが、その声はすでに怖気づいている。

「やる気か」

裸男はすぐみをきかせつつ、小男を踏む足にぎりぎり力を込める。小男は、それでも懸命に壺へと手を伸ばす。

裸男は小男を蹴り転がし、もう一人に拳固を食らわすと、その場にのびてしまう。小男は頭を抱えて逃げる。

「もう終わりか。これでは腕慣らしにもならぬ」

裸男は額の汗を手の甲で払い、笑いながら立ち去ろうとする。

少年が駆け寄り、両手のない腕で止める。裸男は太い腕で細い少年の体を横に押しやる。

「くるな。俺さまがこの世で一番嫌いなものを教えてやる。人に礼を言われることさ。ほら、もう気分が悪くなってきた」

裸男はもじやもじやの髭で隠れる喉首のあたりを撫で、さも不快そうな顔をする。少年はその裸男にからみつくようにして、頭を下げつつあれこれと言う。

「よせ。一日むしゃくしゃしていなければならなくなる。それとも、俺を怒らせたいのか。そうなら好きにだけ言うがよいさ。その代わり、おまえがどうなるか知ったことではない。死なずにすんだら幸いと思え」

少年のからだを払いのける。顔は口や動作とは違つてにこやかである。それを見越して少年はまだ言い続ける。

「黙らないと、かろうじて残っているその二本の腕も、肩からおさらばだぞ。」

何しろ俺さまはだ、今日はとりわけむしゃくしゃしているのさ。なぜかって聞きたいか。教えてやろう。飯は三日、酒は五日、女ときたら三月も縁がない。その上、この暑さだ。むしゃくしゃしない奴などどこにもいない。むしゃくしゃを飛ばすには人間を殴るのが一番だ。そう思っていたところに、お誂い向きに、馬鹿な野郎が俺さまにぶつかってきたものだから、殴ってやったのさ。せつかく少しは気分が晴れたところに、こうくどくど言われたんでは、台なしだ。どうだ、俺さまの拳を食らいたいか」

裸男は高らかに笑う。

人の輪から蘭が歩み出て、腰を屈めつつ裸男に会釈する。

「何だ、貴様は。変な野郎が出てきたな」

蘭の爪先から頭のとっぺんまでねめまわし、

「貴様は先ほど画を描かせた医者か。俺さまに何の用だ。俺さまは医者などに用はない。そこでまだおねんねしている馬鹿野郎を治療してやったら、いくらからもらえるのではないか」

「あなたさまこそは揚州一の男伊達と感服いたしましたな。お名も知らず終わつては残念と、かくしゃしやり出た次第にございます」

「俺さまの名を聞きたいと。それでどうするつもりだ」

「いまのお力を拝見しますに、厄病神を祓うのに、鐘馗さまよりも生きたあなたさまの方が効き目があるうかと思ひましてな」

「何だ、貴様は、錢だけふんだくって効きもしない呪いをする拝み医者か」

「己の口から申すのも恥ずかしい藪医者でしてな。あなたさまのお力を分けていただきたいものですな」

裸男は嬉しそうな顔になり、

「どんな厄病神も俺さまには適うまい。実際、俺さまは病氣などしたことがないのさ。だから、貴様のような藪医者に殺されそうになったこともない。俺さまの力がほしいとはなかなか殊勝な心構えである。しかし、貴様は、この揚州において、この俺さまの名を知らんのか」

「旅の者で、ここ揚州にはまだ半年余りでしてな」



「半年もいて知らぬのか。で、この俺さまの名を知りたいと言うのはどこの誰なのか、貴様から言ってみろ」

「とんだ失礼をいたしましたな。某は京兆は杜陵の韋家の流れを汲む者、いまはしがたい医者、雀蛤と申しております」

「雀と蛤だと。ふざけた名だな。この際、どちらでもいいから食いたいたいものだ。飯は三日食っておらぬと、言ったのを聞いただろう」

裸男は腹のあたりをぼんと叩く。

「よろしかったら、お名前をお聞かせいただくお礼に、好きなものを存分に召し上がっていただきましょうように」

「俺さまの名をそれほど知りたいのなら、食ってやっても悪くない」

「あなたさまのお名前は、私ばかりでなく、ここに集まった人々もみな知りましたがっておりますよな」

「それは至極もつともなことだ。では焦らさずに、ここらで教えて進ぜよう。よく聞け。おまえたちが幸いとこれから先も生きながらえ、幸いにももの覚

えがよく、俺さまをここで見たのを忘れずにいられたなら、孫子の代までずっと自慢できるだろう。自慢の仕方を教えておく。こうするのさ。『いまの偉い偉い天子さまがまだお若いころじゃったぞ。その凛々しくも若さに輝くお姿を、わしは揚州の広場で間近に拝んだのじゃ。この腕が届くくらいこんな近きでな。どうだ驚いただろう』。ざっとまあこんな具合さ。さあさあ、そのときのために、よくよく俺さまを見ておけ。この立派な姿を目に焼き付けるのだ」

裸の男は胸をそらせぐりりと人々を見回す。

蘭は神妙な顔、少年が困惑の表情である他は、他の人たちはどうやら薄笑いを浮かべている。

「さあ、言うぞ。よいか、一度聞いたら決して忘れるな。耳に垢を詰まらせている奴はいまのうちにかっぽじけ。よろしい、静まれ。これから俺さまの名を言うぞ。この俺さまはだ、宋州は碭山午溝里（しゃくざんぎゅうこうり）の朱温（しゅ おん）である。わかったか。今度この名をおまえたちが聞くときは、

俺さまが皇帝になるときさ」

朱温は高らかに笑う。

「痴れ者朱二三」

人々の間から声が飛ぶ。

「誰だ、いま叫んだのは」

朱温はぐいと睨む。

「五経先生のどら息子」

別の声が飛ぶ。

朱温は拳を振り上げる。

「女房が怖くて家に帰れない意気地なし」

人々がどつと笑う。

朱温もにたりと笑う。

「勝手に罵れば良いさ。度量の大きい俺さまはこんなことでは怒りはしない。いま叫んだ連中に訊こうではないか。おまえたちの中で、女房が怖くない奴

がいるのか。いたらここに出てこい。世の中、皇帝から乞食まで、男というものはだ、女房には頭が上がりんと決まっているのさ。外ではどんなに威張っていても、家ではぐんにやり、役立たずさ」

朱温はそう言って股の間を差し、観衆はどつと笑う。

「宰相とお偉く出た奴も女房が怖くて怖くて仕方がなかった。皇帝だって女房が怖くて、とうとう女房が皇帝になっちまったこともある。この俺さまも、宰相さまや皇帝さまをそうおいそれと出し抜く訳にはいかないから、人並みに女房を恐れているのさ。俺さまの女房はどんな女か聞きたいか。教えてやろう。村一番の金持ちの娘。俺さまの死んだ親父ときたら、村一番の貧乏学者だ。村一番の貧乏者の息子が、村一番の金持ちの娘をもらったらどうなると思う。初めからわかっている。女房には金輪際適わない。それでだ、女房の前ではさつぱりこいつの頭が上がりなので、あんまり可哀など、外でちよいとばかり良い思いをさせてやる訳だ。それが、どうしたものか、すぐにはれる。大騒動さ。女房が怒れば、村一番の金持ちが怒る。村一番の貧乏な親

父はがたがた震える。ろくなことにならない。そんなことを繰り返すうちに、親父はくたばり、俺さまは家を飛び出た。いつの間にやら、流れ流れてこの揚州くんだりまできたのさ。俺さまがきたので、この女どもは大喜びだ。俺に抱かれてみる、それだけでも有難い。いい塩梅に子どもでもできてみな、天子さまの御落胤だ。女は未来の皇太后さま。それを狙って俺さまの相手をしたいと、ここに女の列ができてよさそうなもの、しかしだ、この日照りだ。女枯れしてしまったようだな」

朱温が太陽を見上げ、悔しげに足を踏み鳴らすと、人々は手を叩いて笑う。

「これはまことの痴れ者だ」

韋荘が蘭の背につぶやく。

「漢を興した劉邦も、初めのころはこんなものだったのではないですか」

蘭は小声でそう言うと、笑いのおさまるのを待って朱温に向かい、

「有難きお名をお聞かせいただきこの上ない幸せ。では、お約束の通り、まずは腹ごしらえにと、どこぞに御案内させていただきませうかな」

「堅苦しいところは御免だ。親父が口うるさかったから、飯を食うときに四の五の言われるのが大嫌いなんだ。しかし、旨くなければ駄目だ。俺さまはまずいのは食わない。飯は賑やかに食うものだ。どうだ、この絵描きの兄ちゃんも連れていっていいだろう。こんなにも痩せて、どうせろくなものを食っていないのだろう」

「私など滅相ありません」

少年が逃げようとするのを朱温はぐいと引き寄せ、四人で手ごろな店を捜しに行くことになる。

**橋**を渡った先の店で朱温に衣服を買い与え、水辺に臨む酒肆の風通しの良さそうな一角に陣取る。朱温は裏の井戸に回って水を浴びる。

三人で酒と料理を待つ間に聞けば、少年の名は孫何（そんか）と言つ。孫何は床に置いた持参の床几に腰掛けている。それが一番楽なようだ。

孫何は両親の名も顔も知らぬ孤児で、道教の寺院に拾われ、雑多な用を努めて成長し、色白で顔立ちの良いところが道観の長老の目にとまり、特別なかわいがられ方をした。手習いのためにと筆を持たされると、文字を書くよりつつい画を描いてしまい、道観に画工がきたときには、その仕事を一日見て飽きず、いつしか画工の手伝いをして、壁絵の塗りなどをするようになった。道観の長老はひと癖ある男で、何が好きかと言えば、金と稚児の尻。近隣での評判はすこぶる悪く、先の反乱の際に、しこたま金を貯めていると賊軍の格好の標的になり、極彩色で飾られた道観は焼かれ、財物は一切合財盗られ、長老も殺された。孫何はここで手首から先を失った。

命だけは取りとめ、腕の痛みを忍びつつ、流民とともにあてもなくさまよひ、ある日、一人後れて知らぬ道に行き暮れ、仕方なく廃屋の中に潜り込んだ。すきつ腹で眠れず、膝を抱えて夜を明かした。道観にいたころは、長老の寵愛を受け、不自由するところはなく、良くすれば将来は画工になって身を立てられもしようと希望を持っていたのが、手を失ってはどうにもならな

い。みじめな生き様をさらすよりは、ここから動かずに飢え死にしてしまう方がましだと思い、死ぬと決めた。すると、画に未練が残り、燃えさしの木切れを足の指にはさみ、壁板にせめて何か描き残そうと、西王母（せいおうぼ）を選んだ。一粒食べれば三千年の寿命を得る桃を育てる神である。道観の壁にあつた西王母の像を想いつつ、足を使って描いてみた。少しもうまくいかない。どうにかこうにか輪郭らしきものがやつとできた。次は顔だと、西王母に、まだ会つたことのない母の姿を重ね、どう描くか思いを巡らせた。

ふと背後に気配がした。孫何はびくつと振り向いた。背の高い瘦せた僧がいた。「この筆を使いなさい」と、その僧は筆を指の間に挟んだ。孫何は言われるがままに従つた。壁に向かい、顔に取り掛かると、これまでは手でも、そのように描きたくてできなかつたくらいにすらすと描ける。あまりの不思議さに、孫何は、どのような訳でこの筆を使うと画が上手に描けるのか尋ねた。僧は笑つて答えず、「私の通りにしなさい」と、西王母の隣に桃の木を描いた。孫何がまねると、足は手よりも思いのままに動き、そっくりに画が



できた。

「その僧の名は聞かれましたかな」

「貫休さまとおっしゃいます」

韋莊と蘭は顔を見合わせる。

「これは驚きましたな、あの僧ですな」

汴州の相国寺で会った画僧だ。

「待たせたな」

足音高く朱温が入ってくる。鬢に水がしたたり、小ざつぱりとしたなりに変わっている。

「ほう、これは立派になられましたな。その髭も整えたら、見違えましょうな」

ぼさぼさの髭を捻りつつ朱温は、

「俺さまがきれいになったら、女どもが喜ぶだろうが、その前にだ、この腹を喜ばせてやりたい」

「この日照りですからな、喉が渴きますな」

蘭が言う間に酒がくる。

「これは玉杯とは贅沢。酒など腹に入れてしまえば器は何でも同じさ。飼い葉桶でも俺さまは構わない」

朱温はどつかと腰を下ろし、なみなみとつがれた杯を一息にあおる。呑み干すと、やおら立ち上がり、ゆさゆさとからだを揺する。

「五臓六腑を駆け巡るとはまさにこのこと。こうすると酒がからだをよく回る。久しぶりの酒だ、からだのあちこちが驚いていやがる。酒の味など忘れてしまっていたところにもってきて、呑んだことのない上等な奴が入ったから、とまどっている」

朱温は腹を撫で尻を叩き、

「よし」

と、勢いよく椅子に座る。

料理を山盛りにした皿が運ばれる。

揚州の食べ物にもすっかり慣れた。さすがに繁華な町だ、ここならではの味がある。皿の上に、魚の膾が踊り、真夏でも生の魚が食べられるのはさすが揚州である。

「こいつはよい」

朱温は遠慮がない。杯を満たし、呑みかつ食い、

「おまえも食いな」

と、孫何の前に投げるように皿を置く。

「おまえ、手なしでどうやって食うのか。犬のようにかぶりつくのか」

「画と同じです」

孫何は足の指で箸を使う。

「これは器用な奴だ」

魚を油で揚げた料理が運ばれる。

「こいつは、いい匂いだ。たまらん」

朱温は熱いのを口に放り込み、孫何の皿にも二つ三つ投げ入れる。酒をが

ぶがぶ呑み、たちまち瓶が空になると、店の女を呼び、

「こんな上等なのを出すことはない。珍しく今日は上客がきたので、高い酒を飲ませて、しこたま儲けようとの魂胆だな。俺さまは騙されんぞ」

また一皿くる。野菜と魚を煮た料理だ。

「貴様、蛤だか螺だか、旅の医者だと言っていたな。どうだ、揚州は気に入ったか」

「よいところですか」

「ここは天下一だ。俺さまはそう思っている。俺さまは、まだ洛陽も都もいったことがない。いかなくてもわかる。洛陽も都も、威張りくさった役人どもがごろごろしているだけさ。ここは違う。役人などは糞食らえさ」

「気候もよいですか。兄貴の着ているこの白い着物、長安なら、一日で土埃にまみれて鼠色。ここは風が潤っていますな」

「よいところだ。隋の煬帝も、揚州に惚れ込んで、都なんか捨ててしまった。旨いもはいっぱいあるし、女もよいとくれば、誰が長安などに帰るものか」

隋の煬帝を持ち出すところを見ると、五経先生の息子だと言うこの朱温、全くの無知ではなさそうだ。韋荘は試しに問うてみる。

「煬帝は揚州で側近に殺されました。そなたはどうやら皇帝になるのが望みのようですが、ならば、煬帝のように揚州に惚れ込んで溺れているようではまずいではありませんか」

「煬帝と俺さまを比べる気か。全然違う。どう違うのか聞きたいか。聞きたいのなら、もう一皿、料理を頼んでくれ。肉がよい。魚ばかり食わされたのでは、指の間に鱗が生えてしまう。おい、そうだろう」

朱温は大きく手を開き、孫何の目の前でぴらぴらさせる。掌はぶ厚く指は太い。韋荘と大違いだ。

「煬帝の野郎はへまをやらかし、殺された。煬帝の失敗は揚州のせいではない。どこにいても同じさ。女に溺れ、馬鹿者どもを側近に並べれば、失敗しないはずがない。世の中の騒がしさに煬帝は嫌になっちまったのさ。揚州にくると女にすっかりいかれ、女の膝の上で、何もかも忘れようとした。愚か

な男さ。あんたらも気をつけな。女に溺れたら駄目。女は男の心をぐんなりさせてしまう怖いものだ」

朱温は素つ頓狂な声で笑う。酒をがぶがぶ煽り続けで、早くも酔いが回ってきたのだろう。

蘭がにやにやと目を向けたと、韋莊は感じる。

牛肉の塊を盛った皿がくる。朱温は孫何に二つ三つ取って与える。

「あのころ、揚州以外のところは、どこもかしこも反乱だらけだった。側近どもは、全部隠して、何事もありませんと、煬帝に報告した。本当のことを言ったら、煬帝が怒り、大損だ。煬帝だって、もともと馬鹿な男ではない。反乱が続いていることくらい先刻承知だった。しかし、女に溺れていたから、『世は安泰にございます』と側近に言ってほしかった。皇帝と側近はお互いに誤魔化し合っていた訳だが、さすがに暮る不安に耐えられずと言う奴で、側近どもは相談の結果、煬帝を殺した。哀れなことに、煬帝を殺した側近どももすぐに殺された。当然だ。馬鹿な連中の末路は大概こんなものさ」

朱温はまた大笑いする。

「あなたさまは女は嫌いですかな」

蘭が尋ねる。

「嫌いではない。どちらかと言えば、好きだ。だが、俺さまは女に惚れない。迷わない。溺れない。女が俺さまに尽くすのを許すだけだ」

「聞き間違いでなければ、先ほどはお内儀殿を恐れておられるようでしたが」「女房か。あれは女ではない。いや、女ではあるが、女房というものはだ、別だ。親やら親類やらいろいろなところから押し付けられる存在で、どうにもならんしがらみさ。男は誰も全くあれには適わん。この俺さまも、女房とこのうのはいかんともし難い」

朱温は苦りきった顔をつくる。目がとろんとしてゐる。

蘭がまたにやにや己の方を見たとき、章荘は感じる。このむくつけき男の話が、奇妙にも己の身に少しずつ重なる。

「ではお内儀殿のことはこっちに置きまして、側近についてお尋ねしますか

な。あなたさまが皇帝になりましたら、一人で全てを片付ける訳にはいきま  
せんから、大勢の者を使いましょう。側近も必要となるでしょうな。その者  
たちをどう扱うおつもりですかな」

「それは簡単。俺さまの思う通りにさせる。それだけだ。俺さまが天下で一  
番。誰の言うことも俺さまは聞かない。誰もが俺さまの言うことをきく。天  
下にはいくらでも人間がいる。男も女も取替えがいくらでもきく。しかし、  
俺さまはこの俺さま一人しかいない。一人の女に惚れたり、一人の手下を大  
切にしたり、そんなのは愚の骨頂だ。俺さまの役に立たない奴は殺す。それ  
が一番面倒がない」

「なるほど、替えはいくらでもいましょうな。しかし、そのお考えでは、誰  
もついてこないではありませんかな」

「天下を取るには俺さま一人で十分。黙って俺さまの言う通りに動く人間が  
いれば良い。そうでないのは邪魔。殺すしかない」

「本心はそうであっても、口にするのは得とは思えませんな」



朱温はぎろりと睨む。腕を組んで大きく息を吐き、

「十日の間、会わずにいた酒だ。ちと回りが早いようだ」

と、朱温は杯を置き、

「水だ」

朱温は怒鳴り、店の女が持ってきたのをぐいと飲み干し、韋荘と蘭を交互に眺め、

「おまえたちは良い生まれだろう。杜陵の韋氏とか言っていたな。韋氏もぴんからきりまでいろいろだ。その昔、その中でも腑抜けた詩を書いた韋応物とか言うのがいただろう。知っているか」

先祖の名がここで飛び出す。五経先生の息子は意外な知恵者かも知れない。

「遠い縁がない訳ではありません」

「はつきりしない言い回しだ。俺さまの死んだ親父が、どこで仕入れてきたのか、そいつの詩を、俺さまの説教に使ってくれたものだ。おまえたちはどうせ知りもしないだろうが、韋応物は若いころは都の兵士で、相当に自堕落

な奴だったらしい。ところが、安祿山の太乱に出くわし、これはいけないと心を入れ替え、真人間になって勉強に精を出し、お蔭で立派な官人になって、出世を遂げたという大層な野郎だ。親父の五経先生は、俺さまに向かって、どうか韋応物のようになってくれと、懇々と説教をした。大笑いだろう。皇帝になる俺さまがだ、どうして貢奉なんぞ受けるものか。漢を興した高祖も、唐を興した高祖も太宗も、受験勉強に励んで天下を取ったのか。おい、どうなんだ」

朱温はまた笑い、途中で腹を押さえる。

「急に腹が痛くなってきた。すきつ腹でぐいぐいむしやむしやらかしたのが悪かったのか。どうもうまくおさまってくれない。病気ばかりしていた親父のようになっちまうのは御免だぜ」

蘭は小さな包みを出し、

「これで、十中八九、すつきりしましょうな」

丸薬を一つこぼす。

「そうか、おまえは医者だった。藪なんだろう。しびれ薬かなんぞを飲ませて、身ぐるみ剥むごうって言う気か」

「身ぐるみ剥むいでもよいのですが、その衣服は、いま買かって差し上げたもの」  
韋荘が言うと、朱温は。ぺろりと舌を出し、その上に丸薬を載せる。

「ちよつと苦いが、飲めばじきすつとなりますな」

朱温は顔をしかめ、残のこっていた水で流し込む。

「親父は大馬鹿者だ。貢拳を何度も受け、身を削けって勉強べんきやうしたくせに、郷試きやうしさえ一度も通とらなかつた。仕方なく、村の子ども集あめて字を教え、どうにかこうにか口に糊かし、勉強べんきやうのしすぎだろう、病気びやうきばかりしていつも青い顔で薬を飲のんでいた。詰つまらん一生いっせいさ。俺おれさまはあの真似まねはしない。韋わい応物おうぶつの真似まねも御免ごめんだ。兵士へいしだったのならどうして剣けんで勝負しやうぶをしないのだ。貢拳きんけんに受うかつたところで、せいぜいなれて田舎いんがの知事ちじ。余程よほどうまくすれば宰相さいしやうだが、宰相さいしやうの上うへには皇帝てんていがいる。宦官くわんわんやら節度使せつどしやら手に負おえない連中れんちゆうがうようよして、宰相さいしやうだつてさんざん苦勞くろうをするだけさ。実に詰つまらん。剣けんをうまく使つかえば皇

帝になれる。しかし、俺さまもののわからん人間ではない。韋応物をけなすのは気の毒かも知れないな。あれは生きた時代が悪かったのさ。安祿山は殺され、世は泰平に逆戻りだ。それでは剣があっても天下は取れない。幸いにもいまは違う。俺さまにとつてこんなよいときはない」

朱温は大いにまくしたてる。

裸で何も持たないくせに威勢がよい。あるいは、何も持たないからこそ威勢がよいのか。仏蕃は、捨てると言った。裸の朱温こそは、全てを捨てた男か。朱温は何も持たないからこそ皇帝になれると思っている。

韋荘は何も捨てられない。嫋嫋のためであつても捨てることができない。皇帝になろうという朱温の欲望は限りなく大きい。それは決して捨てはしない。それが途方もなく大きいので、他のものはいらないのか。

朱温は大きなげっぷを吐く。

「薬が効いてきましたかな。こんな藪医者ですが、御即位された暁には、御殿医にでもしていただけましようかな」

「貴様に俺さまの御殿医が務まるかな。今日のところは、この薬で貴様はちよっぴり面目をほどこしたが、いつでも首がつながっている保証はないぞ。」

役立たぬ男は俺さまは殺す。薬が効かなかったら、即刻、刎ねてやる」

「せいぜい医術の腕を磨いておきましょう」

蘭は真面目腐った顔で、首のあたりを撫でる。

「藪医者はともかく、そっちの絵描きの兄ちゃんは、随分とおとなしくして  
いて、俺さまは気に入っている。皇帝の前ではいらぬ口をきかぬのが一番さ。」

宮廷絵師にしてやってもよいぞ。どうだ、嬉しいか」

孫何は顔を上げて礼を言う。

「礼を言われるのは大嫌いだと言っただろう」

孫何は慌てて謝る。

「やけに素直な奴だ。おまえ、何歳だ」

「十六です」

「十六か。俺さまの四つ下か。その齢で手を切られ、悪い生まれ合わせだと

思っているだろう。年寄りどもは、溜息まじりに、昔は良かったと、大唐の泰平の日々を懐かしがる。俺さまの親爺もそうだった。馬鹿な親父は、大唐から何の恩恵も受けなかったくせに、無闇と有難がっていた。年寄りの懐かしがる旧き良き時代ではなく、こんな乱れた世に生まれたのは不幸せだと、おまえも思っているだろう」

「手を失った当初は、確かに、世を呪いました。平和な時代ならこうはならなかったはずです。しかし、お師匠様より筆を授かり、その考えを改めました。手がないので、足で画を描きます。初めはもちろん仕方なくそうしていたのですが、考えてみれば、足にとつては手がなくなったのが幸運だったのです。そうでしょう、手があれば足には、画を描く役割は決してまわってきませんから。足の幸運を喜ぼうと思うようになりました。私はこの足のために生き、この足によって生かされています」

孫何は頬を赤らめつつ答える。

「おまえはよいことを言う。泰平の世が終わり、唐の天下が崩れればこそ、

俺さまの番がくる。俺さまとおまえの足は同じだ。おまえとは気が合いそう  
だ」

孫何は困ったような顔をするが、朱温は構わず、

「どうだ、おまえ、俺さまの顔を描かぬか。皇帝の若い日の姿を描き留めて  
おこうとは思わぬか」

孫何は朱温を見上げて考える。

蘭が笑いながら、

「お代の心配なら、俺が払いましょうかな」

「そうしてくれ」

孫何は成り行きから、筆を執ることになる。朱温は胸を張ってそっくり返  
る。酔眼朦朧として、同じ姿勢を保っていられない。蘭はにやにや眺めてい  
る。

ひよつとしてこの男、皇帝は無理としても、何かしら為すのだろうか。無  
一文の裸で往来を歩き回る男には、己にはない何か秘められていなくもな

い。この男の父親の五経先生と己はどうやら大差なきさうだ。貢筆を受けて失敗し、旧い時代の規範に囚われている。この男のように裸になつて初めて、新しいものが生み出せるのだろうか。

孫何は大切な手を失いながらも、足で画を描き、戦乱の後のいまを生き抜いている。もしも虢州にも戦火が及び、何もかも失い、我が身も傷つけられたなら、果たしてその後を孫何のように生き続けられるのだろうか。

孫何は大道でやっていたのと同じように、さらさらと描き上げ、足の指にはさんだ画の上に掲げる。朱温は下唇を突き出し、目を斜めに覗き込み、手を打つて笑う。絵の中に朱温は堂々の冕服を着た皇帝としておさまっている。

「これはこれは、大したものですか」

蘭が茶化すように言う。

朱温は孫何から筆を取り上げ、

「大皇帝朱温之像」

と、己の画の脇に書き添える。



「この画はおまえに預ける。よいか、俺さまが皇帝になったら持つてこい。約束通り貴様を宮廷画家にしてやる。貴様たち二人も、一緒にくれば、今日の酒の礼をしよう。皇帝になった俺さまはけちけち言わない。何でも望みを叶えてやる。貴様は御殿医だ。そっちの貴様は宰相か。何でも望むがまだ。俺さまのいまの言葉に嘘はない。その証拠がこの画だ。大事に持つていろ」朱温は画を孫何に投げ与え、満足そうに大あくびをすると、卓の上に突っ伏して、すぐさま大鼾をかき始める。

**酔**いつぶれた朱温を孫何に託し、韋荘と蘭は店を出る。

西に傾いた夏の陽が川面に揺れる。心持ち涼しくなってきたようだ。柳の蔭に、船頭の勇ましい掛け声が立ち、韋荘の耳から朱温の声を拭い去る。解き放たれたような気分が湧き上がる。

あの裸ん坊に圧倒されていたようだ。おかしなことだ。何も持たぬ男に引

け目を感じる理由はないはずだ。

「今日はこれからどうするのだい」

先をいく蘭に声をかける。

「そうですね、含弘山寺あたりはどうですか」

「含弘山寺。何だいそれは」

蘭は立ち止まり、向かいの川の先にぼんやり見える丘を指し示す。

「兄貴、忘れたのですかな、揚州郊外の含弘山寺ですな。貫休がそこに帰るかも知れないと言っていたではありませんかな」

「そうだった。で、含弘山寺にいつてどうするのだ」

「兄貴が仏蕃に約束した堂。その壁に、何か描いてもらってはどうかと思いつきましてな。どうですか、早速、その話を付けにいきませんか」

「貫休にか。そなたの考えることはさっぱりわからない。何か意味があるのかい」

「さあて、意味ですか、わかりませんな。何事も風任せですからな」

「もうすぐ日が暮れるぞ。何もこれからでなくてもよいだろう」

「酔い覚ましにはよい趣向と思つたのですが、まあ、やめておきますか。で、兄貴はどちらにいくつもりですか」

「今日は暑さの中を歩き回り、あの男の話を聞いてちよいと疲れた。ゆつたり休めるところにいききたいものだ」

「ならば、店に帰りますかな。あの角を曲がると案外近道ですな」

「それもそうではあるが」

蘭の店よりは余程いききたいところがある。

「揚州はよい町ですな。夕方になると往来の人が増えて賑やかになりますな。長安とは逆。あそこでは日暮れに太鼓がどんと鳴れば、門がぴたりと閉まり、大通りには出られません。揚州には坊を囲む窮屈な壁はないし太鼓も鳴らない。日が傾くと、心もそぞろとなった人々がどこからともなく湧いてきますな。兄貴もその一人という訳でしょうな」

「いや、今日はそなたの店にいくつもりでいる」

「まあ、好きになさいませ」

「あの角で右にいけばよいのだろう」

蘭はいつの間にもやら韋荘よりも後ろに下がり、

「どうぞどうぞ真っ直ぐに。煬帝のようにお遊びになられませ」

「そんなつもりなどない」

「俺はちよつと用を思い出しました。後でいくかも知れませんが、ここで」

と、声を残し、従弟はたちまち人の流れの中に小さくなる。

一人になれば、足は自ずと嫋嫋のいる妓館に向かうしかない。

今朝出てきて半日しか経っていないのに、会いたさが募る。とりわけ小さな諍いをしただけに、一刻も早くいかねばならない気になる。

橋を一つ渡り、このあたりまでくれば、妓楼への道は、目をつぶっても歩けるほどだ。そんな風になるために揚州にきたのではもちろんない。己の新たな道を見つけたためだった。一人の女に心を奪われようとは思ってもいなかった。こうなってしまうた己をどう扱ったらよいのか。

一つの結着を付ける最も簡単な手段は、虢州に帰ると決めることだ。いまの韋莊にもそれくらいはわかる。別れはどのような形でもあり得る。揚州特産の青銅鏡を互いに贈り合い、涙ながらに再会を誓う。その言葉は嘘ではなくても、再会はあるまいと二人とも暗黙のうちにわかっている。揚州を離れ、虢州に帰り着き、日が経てば、次第に気持ちも薄れ、何事もなかったようになるだろう。嫋嫋も同じだ。そうすればよいだけのことだ。しかし、半日で恋しくなる女に別れを告げるなど、どうしてできようか。

ならば、莊園には帰らずに、嫋嫋のいるこの揚州に残ると決めてはどうか。全てを捨てて嫋嫋と二人だけで生きる。

揚州にいられるのは束の間のこと。これはあくまでも旅である。莊園なくして己はない。

虢州に帰って己は何をするのか。また元通りか。それが本当の己と、己自身を納得させるのか。

九里三十歩街に間もなく明かりが灯される。その下を己が歩く。虢州にあ

つては想像もつかないその姿こそが、あるいは本当の己なのか。

そうに違いない。嫋嫋を思うこの心に照らせば、このいまの己が本当の己でないはずがない。嫋嫋との出会いによって、己は初めて本来の己を知ったのか。嫋嫋と一瞬たりとも離れない。それが己の望みだ。そうしている己こそが本物だ。

むろん、それは長く続くものではない。どれほど女に迷う韋荘でも、わかっている。己は夢の中で生きているのではない。どうあっても現実の内にいる。虢州の莊園があつて蘭の稼ぎがあつて揚州で遊んでいられる。唐朝は傾き、戦雲はいつこの空を覆うのか予想もつかない。一朝事があれば全てを失うかも知れない時期に、うかうかと芸妓に身も心もとろかしている己は何なのか。

いや、これこそがまごうかたなき韋荘である。

明日にはこうしていらなくなるのなら、今日はこうしてあるべきだ。今日には本当の己を貫けるのなら、そうしないでよいはずがない。

揚州の街の夕暮れの歩みに己の全ての心を込めて、韋荘は妓楼へと向かう。